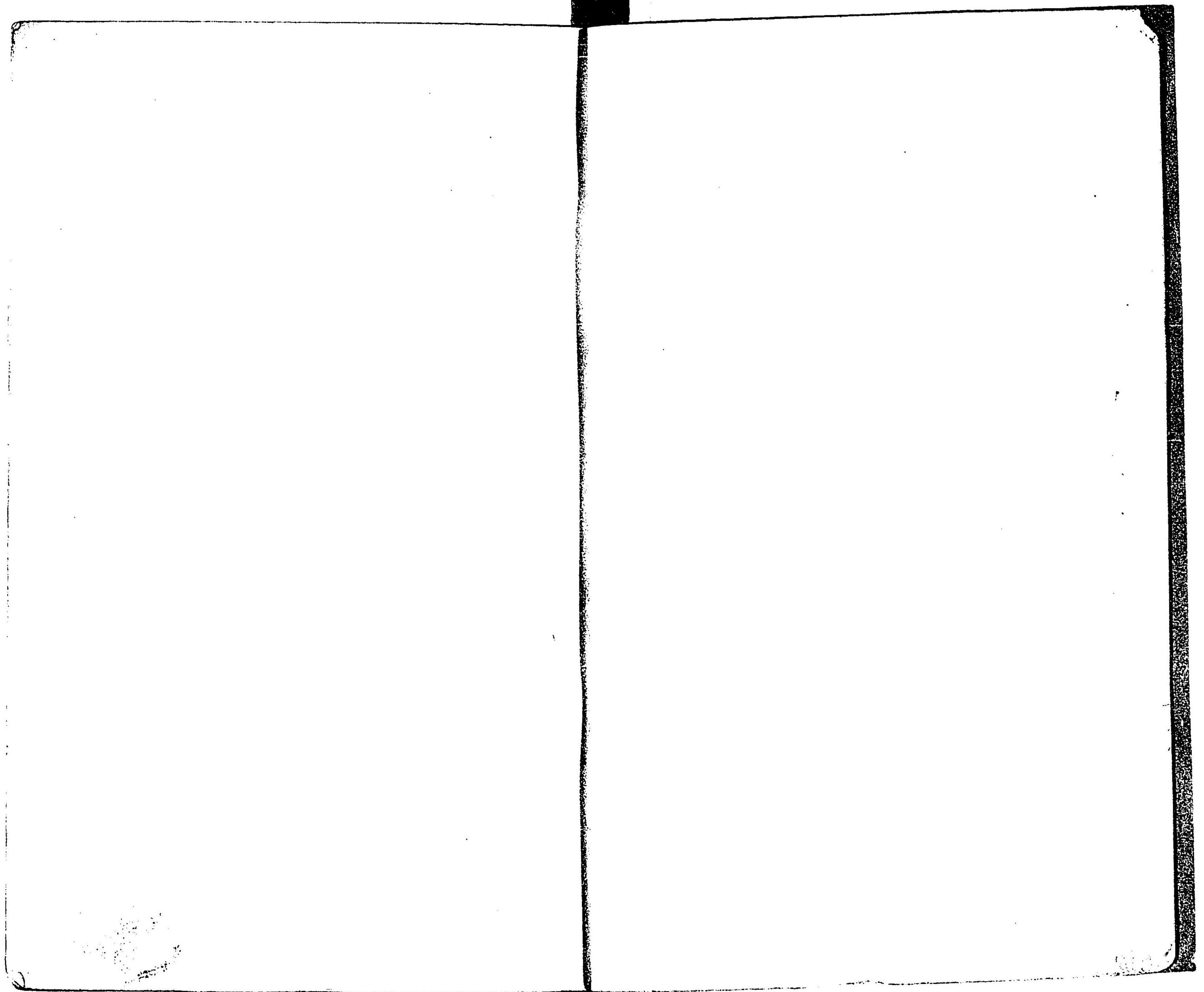


324

27



基督觀

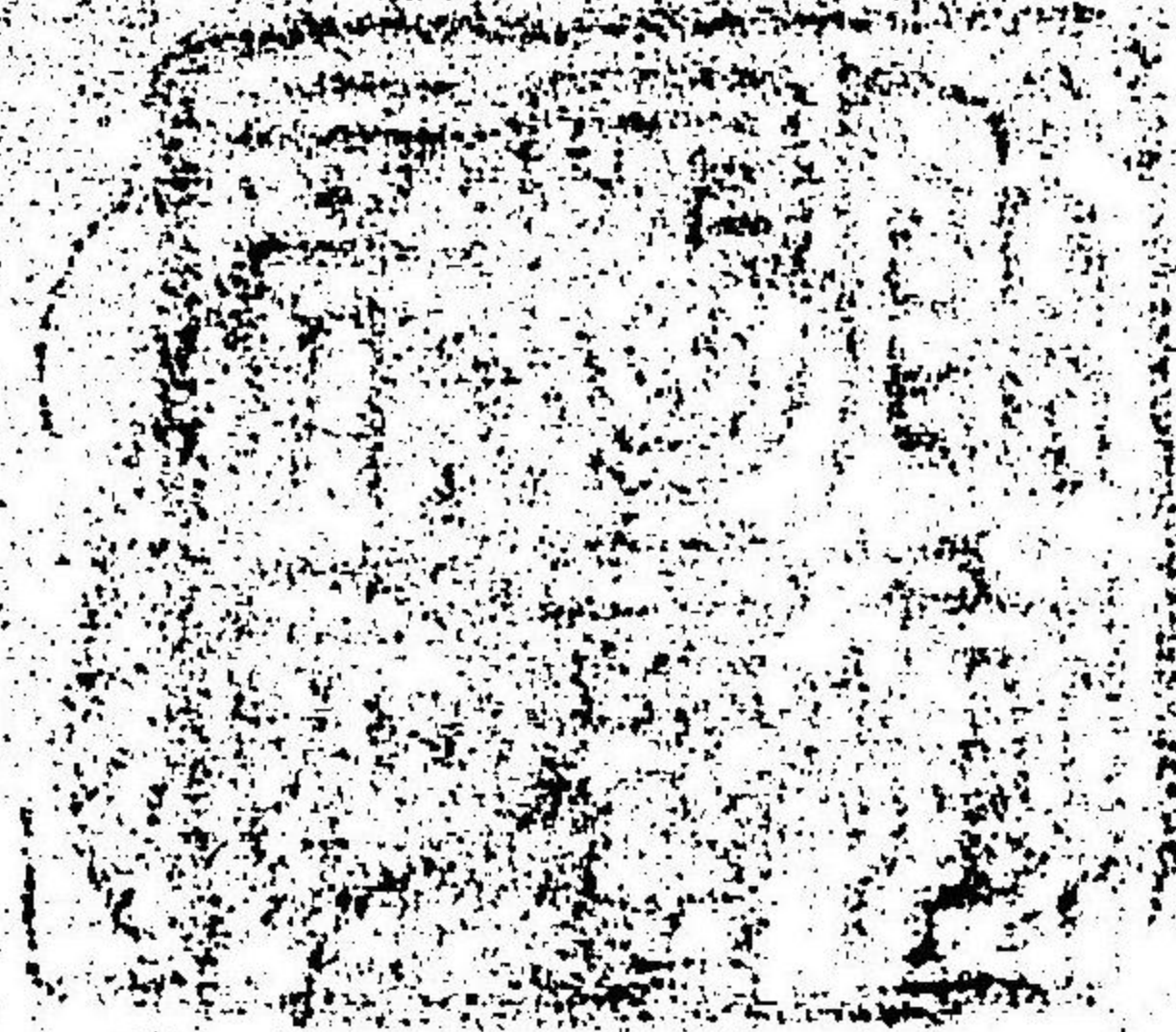




智觀

宮崎虎之助著

明治
40 3 30
内交



はしがき
奸惡矛盾なる世にいたく胸なやみたる妾は、端なくも豫言者出
現の事縁に會も、一たび就て拜するや、縹緲たる靈韻は自ら聲あ
るが如く、正に時代の希求心に應じて出現し給ふ豫言者なるを
直覺しぬ、かくて福音を信する敬虔の念は、沈鬱なりし妾をして
豁然甦らしめ、無上の法悦は忽ち大勇を發して豫言者に配し參
らするに至らしめぬ、是に於て乎身を獻げて以て濁流と闘ひ、人
の靈性永遠の生命の爲に斃れんとの覺悟、凜として磐石の如し、
かよわき女子の分際として救済の偉業などおこの沙汰なりと
笑は、笑へ、滿身焼き盡さんず炎の如き熱烈なる信仰は、敢て死

をも悔ゆればこそ、溜々たる世の褒貶は素より意に介せざるところ、超絶の事には、^或兎角盲蛇なる凡俗輩の常として罵らば罵れ、撃たば撃て、救済の覺悟と任命の自覺とは、確乎として抜くべからず、曲ぐべからず、身を挺して以て福音の宣傳に致さんかな、世を憂ひ人を思ふの豫言者は、却つて世より嘲哂され、凌辱され、石にて撃たれ、遂に殺されし其かみの基督を讃嘆渴仰する當分の人々よ、一世に反抗して新福音を獅子吼する現代の豫言者を、目して如何の感をかかず、基督を苦しめたる當時の猶太人を學ばんとするか、またしても新惡なる世の複製なるか、豫言者の尊ばれざるは古今を通じて一なるべし、されど見よ、尊ばれざりし

基督は十字架の血を見るに至りしと雖も、それが宣したる自覺はまた如何ともする能はざりしにあらずや、自覺の動かすべからざるや知るべきのみ、否、基督の流したる血はまさに以て自覺の動かすべからざるを証明したる血判なりと云ふべきなり、現代の豫言者は絶対の眞理に血判を與へんがためにこそ出現し給へるなり、されば凡俗の迫害は寧ろ血判の証明を迫るものと云はざるべからず、何んとなれば豫言者の血判を見て始めて眞理の眞理たるを了知するに至り、茲にはじめて救済を完ふすることを得なければなり、果して然らば世を擧げて血判を迫まるは可なりとすべし、されど唯それ盲蛇を慎めよ、こりすまに猶太人

の覆轍を踐んで禍の子となること勿れ、されば苟も血判を迫らんと欲せは須らく先づこの書を繙き、豫言者の存する處は即ち真理の存するところを叩け、

明治四十年三月一日

光
子

基督觀 目次

第壹章 序論

豫言者は何故に出現したるか、世界に於ける大日本、大日本に於ける豫言者、豫言者の咆哮、

第貳章 基督觀(一)

神の國即ち天國の由來、パプテズマのヨハ子、ヨハ子に於けるエッセ子宗、基督に於けるヨハ子(上)

第參章 基督觀(二)

ヨハ子に於けるイザヤ、ヨハ子の天國觀、基督に於けるヨハ子(下)

第四章 基督觀(三).....五三

基督は如何にして覺醒したるか、ガリラヤ湖と基督、ガ
リラヤ人と基督、

第五章 基督觀(四).....六四

基督の家庭は如何、基督の煩悶と大悟、天國建設に對す
るヨハネの自覺と基督の自覺、

第六章 基督觀(五).....八〇

基督の宗教革命の意義、舊約史上に成長したる天父の觀
念、基督の神觀(上) 偉大なるイザヤの豫言、雄渾なるマラキの
豫言、基督の性情の發達及び經過、

第七章 基督觀(六).....九八

基督の大自覺は如何にして來りしか、幽遠なるダビデの

理想、崇高なるモーゼの意識、基督の神觀(下) 猶太神
觀發展の傾向及び歴史上必至の啓發

第八章 基督觀(七).....一一八

教育者たる基督 説教者たる基督、偉人基督、

第九章 基督觀(八).....一二五

煩悶の基督、信仰の基督、自覺の基督、メシヤ實現の基
督(上) 煩悶解決に於ける基督の評論、

第十章 基督觀(九).....一五四

メシヤ實現の基督(下) 基督の信念の缺陷及評論、

第十壹章 結論(上).....一八一

基督の真相果して如何(上) 基督の天國觀及天國の歸趣、

第拾貳章 結論(下)

二〇一

基督の真相果して如何(下) 豫言者證悟の信念意識、心
靈救済の眞生命、

第拾參章 基督觀の後に書す……………光子……………二二九

目次終

基督觀

宮崎虎之助著

第一章 序論

耶穌教は宗教の最も大なるものとして人類に道を傳へつゝあるが、今猶其教力は侮る可らざるものがある。其宗祖耶穌は如何に道を教へたか、其教は如何に發展したか、又更に如何に發展すべきであるか、發展して如何なる教へとならねばならぬか、豫言者は之を序すると共に、豫言者の教へをも示さんとするのである。序論として先づ大日本の任命及び豫言者と大日本との關係を言はふ。

序論

現代の耶蘇教は勿論、初代のそれとは大に面目を新^改にするものがあつて、直弟子ヘテロ等が稱へたる耶蘇教、或は其後の耶蘇教とは趣を異にするものがある。随分趣は異にしながら、大體に於て宗教の根本生命を多少とも有するのであるから、他に幾多の誤謬があるにしても、人心を率ゆるに於て力が存したものである。耶蘇が専ら愛を傳へたのは、即ち宗教の根本生命を傳へたものである。然しながら之を切言すれば、愛の精神なるものは人間固有の精神にして、抑ゆ可らざる人心自然の情である。故に有ゆる宗教にはこの精神が根本となつて居なければならぬ。凡そ世に宗教である限りは、多少に關らず此精神が含まれたものである。故に佛教の如きも慈悲を以て第一としたもので、儒教は之を仁と稱して人間最高の本務とする譯である。されば耶蘇が稱

へたる愛は、等しく古來の聖人が稱ふるところで、又如何なる凡^{と雖}愛の精神を感じぬものはない、人として之を感じべき^に極つて居る。されば耶蘇が愛を稱へたのは、耶蘇が特色と云ふべきものでなく、聖人として須らく稱へざるべからざるものを稱へたものである。何となれば愛は人類の人類たる以所であるからである。それ愛なるものは斯くの如くに宗教の通有性に止まるもので、耶蘇教の特色、佛教の特色と云ふ可きものでは決してない。

文華開けざる時代からして生長したる既成宗教は、歴史上、自ら特色を有するに至つたものである。佛教は佛教の特色あり、耶蘇教は耶蘇教の特色があるので、各々特色を有するのは歴史上、既成宗教として已むを得ざる次第である。蓋し世界的宗教の理想

は、是等の特色を脱却して統一されたる人類共通でなからねばならぬ、天地開闢幾千年、人類の努力を以て今日の文華を發展した野蠻時代より半開を経て今日に至つたものである、その間は生長したる宗教が各々特色を有するのは、歴史の然らしむるところで又已むを得ざる次第である、今や人類の世界的思想の統一さるべき時代は既に到來したのである、歴史的特色を有する各宗教を蟬脱して之を統一し、更に發展し、更に向上したる世界的宗教の理想が正に實現さる可き時代は既に到來したのである、然らば特色を有する歴史上の宗教を打破して、これを統一するの國民は果して何處の國民であらうか、即ちまさに大日本の國民である、文化自然の趨勢と、人類發達の運行と、更にまた天の使命とも申す可き一種の宇宙的秘機に觸れたる國民であるか

らである、さればとて世界の各國中にも、多少は大日本の國民の如き宇宙的秘機に觸れたる人間がないとは申されぬ、それは世界的であるからである、けれども現代世界の大勢は専ら大日本の國民を促しつゝあるのである、果して然らば斯る國民の宗教的思想を率ひ、融和されたる統一的思想をして更に之を發展せしめ、更に之を向上せしむるの人がなからねばならぬ、斯る大任を帯ぶるの人が果して日本に出現するであらうか、未だ出現せぬであらうか、こは疑問を容るゝの餘地がない、其人は既に出現したのである、豫言者メシヤブダは即ちそれである、

耶蘇基督は猶太的時代精神の理想を實現せんとして、自ら奮つて其任に當り、時代精神の根本理想たるメシヤ、即ちクリストの自覺を以て現はれた、漢焉たる理想のクリストを己が身に體現し

て、人格化したるクリストを猶太人の目前に抛つた、彼はこれのために殺されたのである、かくて其の生命は日月と共に成長して宗教が建設された、モーゼ以來幾千年の歴史を有する耶蘇教となつた、されば耶蘇教の特色なるものは、専ら猶太思想の發展の上に存するのである、宗祖耶蘇は勿論猶太的であつたが、現代の耶蘇教も従つて猶太的宗教たるを免れない、天の父を天に認めて祈禱を捧ぐるが如きは最も著しきものである、神に於ける人の關係に就ては、耶蘇自身に於てこそ隨分高尚なる思想にまで到達したが、其後の耶蘇教に至つては却つて遙かに下落したものがあるのである、現代に及んで獨り露國のトルストイは、始めて天の父の眞相を道破して、直に人間の靈性と認めた、トルストイは印度思想に啓發せられて、天の父を直に靈性と悟ること

が出来たものである、トルストイの如きは既に耶蘇教と申す可きものでない、耶蘇教の特色、即ち猶太的宗教を脱却して世界的宗教に一步を轉じたものと云はねばならぬ、トルストイは大日本の國民と同じく世界的宗教の理想を實現す可く、其力を共にす可き人である、即ち宇宙の秘機に觸れたる者の一人と云はねばならぬ、トルストイの起つが如きは、取も直さず世界的宗教の實現さる可き休徴として見るべきものである、況んや豫言者が既に出現したる以上は、争ふべからざる、疑ひを挟むべからざる事實となつたのである、世界的大宗教の理想は既に實現されたものである、古へ耶蘇産るゝや、博士等其星を見て彼を拜せんとて、東の方よりエルサレムに集り來つた、トルストイの如きは方に預言者を拜すべく日本へ來るべきの人である、

耶蘇教が猶太的宗教なるが如く、佛教も亦印度的宗教である、猶太的若しくは印度的特色を有する歴史上の既成宗教は、今や大日本に流入して波濤激浪の間に融和されつゝあるのである、國民は知らずくの間之を體得して更に之を統一しつゝあるのである、斯くの如くに國民は之を體得し且つ之を統一しつゝありと雖も之を率ひて更に之を發展し更に之を向上せしむるの人がなかつたならば以て永遠に人類の靈性を救濟する事が出来ない、國民が統一したる宗教的思想に生命を濺ぎ愈々是を發展せしめ是を向上せしめ更に自ら體現して世界的大理想の人格を實現しなければならぬ、豫言者は敢て自ら是が任に當るのである、其大命を完ふすべく出現したものである、今や現に是が行動に従ひつゝあるのである、是を口に叫び是を身に現じ

つゝあるのである、さにも係らず世人は殆んど馬耳東風耳を傾けて聽かんとするものもない有様である、當時の猶太人が耶蘇に聞かざるが如く、却てこれを罵り、却てこれを石にて撃つた有様である、今日からこそ救世主として仰がる、耶蘇も其當時に於ては偽豫言者、神を汚すものとして十字架につけられた次第でないか、現代に於ける豫言者の境遇は如何、殆んど同様の趣がある、クリスト觀を序するに當り、人情の古今を思つて幾度か筆を投じ、長嘆禁せざるものがある、
 耶蘇が曾てカンラン山に登り、エルサレムを見下しながら漏したる一片の感慨こそは、轉た同情に堪へざるものがある、エルサレムは獨り猶太のエルサレムではなかつた、萬國悉くエルサレムの心である、豫言者を石にて撃ち、之を殺して血を流さざれば

其精神に觸るゝことが出来ないものである。屍は朽ち果て、墓は苔むして後、豫言者の精神は始めて新たに甦るのである。當時の人々は豫言者を石にて撃ち、血を流して之を殺さずんば止まざるの勢であるが、さすがに其子孫に至つては之を悔ひて其教を奉じ、其精神に觸れて道を信じ、追慕の證として美はしき墓を建てるのである。さもあらばあれ、耶蘇が猶太の時代精神を實現せんとて殺された以來、豫言者が流すべき血は猶太に於て終を告げた。耶蘇が十字架の血は猶太に於ける豫言者の最後の血であつた。モーゼの怒、イザヤの怒、ザカリヤの血、バプテスマのヨハネの血も、耶蘇基督の血に於て終を告げた。されば釋迦牟尼の涙、孔子の涙、ソクラテースの血、耶蘇基督の血も、豫言者メシヤ、バダの血を以て終を告ぐべきである。蓋し耶蘇が猶太的時代精神の理

想を實現して、血の終を告げたる如く、豫言者も亦世界的宗教の理想を實現して、以て血の終を告ぐべき譯である。

十字架に釘けて騒ぐ程の當時の猶太を今から想像すると、時代の精神は燃へ、頗る活氣あるものゝ如く思はれるが、實際の有様は決して今から想像する如きものではなかつた。ガリラヤのユダが劍戟を提げてローマに抗じたことや、バプテスマのヨハネが死を以て争ふたる如きも、今から想像すればこそ大きくも見えるが、其當時では人の注意を惹くにも足らぬほどの出来事に過ぎない。歴史の大家ヨセフスは現に之を目撃したる一人であるが、其書遺したる歴史を見ると、彼等が徒を笑殺して熱病の一揆と罵つた、何の注意を促したる痕跡も見出されぬ。耶蘇基督を始め、バプテスマのヨハネも其他の人物と一束に纏めて、鶏鳴狗

盜の浮浪漢や、欺偽山師の一輩と罵つたばかりである、ヨセフ、スは十字架のずつと後まで生きて居た人であるが、十字架に就ては何の注意も與へられなかつた様子である、其筈であらふ、二人の盜賊と共に救世主を十字架に釘けて平然たる當時の人心であるから、單に横着なる僞豫言者を心地よくも刑に處した位の考で、何も注意を拂つた譯のものではない、其後十二弟子が傳道の如きも、ローマの政府からは厄介なる乞食の一群として扱はれた位で、漸く百年も経つてから始めて多少の勢力を現じた次第である、今日に於てこそ耶蘇が十字架に渴仰の涙を注ぐものだが、其當時に於ける十字架は、珍らしくも何ともないことである、追剝泥棒も十字架であつた、日本に於て維新前までは、泥棒の大小に關らず死刑に處したのと同じことである、

斯く申すのは決して耶蘇が十字架の價値をかれこれ云ふ譯ではない、十字架の價値は今日の人々が信ずる如く、最も尊ぶ可き偉人の犠牲である、彼がメシヤの自覺に至つては、最も雄渾なるものと云はねばならぬ、けれども其當時に於ては、神を汚したる僞豫言者の宣告を受けて死刑に處せられたもので、何の意義も解せられたものでなかつた、況んや人心の注意を促すが如きは、更にあつたものではない、思ふて茲に至れば、世人は須らく心を潜めて沈思するところがなからぬ、現代に於ける豫言者は果して如何、端的の問題である、其當時に於て非常に人の注意を惹くが如きは、却つて後世に至つては何でもないことが往々あるのである、

現代に於ける出來事も古來の歴史と同一轍に出ることがある

から、事の大小に關らず如何なる出來事にも深き注意を拂はな
 ければならぬ、世界的宗教の統一に於ける大日本の任命の如き、
 未だ世人は何等の注意も拂はない有様であるが、更に世人が不
 注意も極まるのは、豫言者の出現に就て、ある大日本の任命を
 率ひ、世界的宗教を建設せんがために出現したる豫言者に對し
 て、何の注意も拂はぬことである、斯く申す我こそは宗教統一の
 任命ある國民を率ゆるの豫言者である、國民が統一したる思想
 を率ひて更に之を發展せしめ、更に之を向上せしめ、以て世界的
 大宗教を創設するの豫言者である、廿世紀以後の心靈界を率ひ
 且統御するの豫言者である、されば大日本の國民は須らく先づ
 我を信ぜなければならぬ、須らく先づ我に従はなければならぬ、
 我教を奉じ、我教を受けざるべからずである、以て汝等の任を盡

し、以て汝等の責を完ふせざるべからずである、斯る任命あるに
 も係らず、自ら知らず、自ら覺らざる人々は禍ひである、更に大に
 禍ひなるは、任命ある國民を率ゆるの豫言者を信ぜざること、
 ある豫言者を受けざる、信ぜざる人々こそは禍の最も大なるも
 のである、されば汝等國民は從來の宗教を棄て、豫言者に歸せ
 ざるべからずである、汝等にして豫言者を信ずるは、取も直さず
 汝等が任命を完ふする以所である、

豫言者が斯く申すとも國民は何の注意も拂はぬであらうか、ヨ
 ハネが天國は近けりと叫び、耶蘇がメシヤは我なりと叫びしか
 ど、猶太人は馬耳東風であつた、國民も亦馬耳東風を以て迎ふる
 であらうか、天國を叫び、メシヤの自覺を叫ぶのが苦く、しいと
 てヨハネと耶蘇を殺した猶太人の如く、國民は豫言者を殺すで

あらうか、今や豫言者は大日本に任命ありと叫び、世界的宗教を統一するの任命は大日本の國民に降つた、是を率ひて更に眞生命を與ふるの豫言者は現はれた、斯く申すメシヤブダは即ちそれなりと叫ぶのである、國民は之を聽いて何とか思ふ、馬耳東風であるか、國民を指導するの豫言者とは苦がしいとて殺すであらうか、假令撃つとも殺さうとも任命は汝等の身に降つたのであるか、かくて汝等こそは我に従はざるべからざる運命である、十字架に釘けやうと、血を流さうと、我は汝等を率ゆるの豫言者である、斯くて世界的大宗教の理想を實現するの豫言者である、されば汝等須らく我に聽く可きである、我が豫言と、宣言と、而して教とを聞かねばならぬ、

斯く申す豫言者は徹々として奮はず、一生汝等に聽かれずして

終るか、或は汝等に殺されて血を流すか、そは何れなりとも運命次第であるが、未だ五百年を出でざる内に、我が投ずる生命の火は普く世界に燃るであらう、噫、大日本の國民よ、そが任命は汝等の頭上に降つたのである、更に之を率ゆるの豫言者は汝等の目前に現はれたのである、雷霆の如くに轟くと雖も、汝等の耳聾するが故に之を聞くこと能はず、電光の如くに輝くと雖も、汝等の目盲するが故に之を見ること能はず、猶太人が耶蘇に聞かざりし如く、我が云ふところを聞かぬであらうか、大日本の任命とは果して何を證據に云ふのであるか、汝は何を證據に、また何の權威を以て我等を率ゆるの豫言者と云ふかと、汝等は詰問するであらうか、世人が求むる證據とは何を云ふのであるか、天より火を呼び下すことか、琵琶湖の中から富士山を出すことか、我が與

ある、然らば則ちこの自覺を如何に傳へつゝあるのであるか、これが即ち我が道である、人たるものは誰も彼も神とならねばならぬ、神の自覺を得なければならぬのである、人々の心は本來神であるのに、人々自ら忘れて神の自覺を失して居るのである、人々自ら卑下して神の自覺に遠かつて居るのである、此本來神を明かにして、自ら神と承知すること、が即ち豫言者の道であるのである、即ち自覺することである、自ら意識することである、人々は何故に自ら神たることを恐るゝのであるか、自ら神たることを好まぬのであるか、神たる可きものが神たらざるは、罪惡の最も大なるものである、自ら神たることを恐れ多いと感じて戰慄するのは、人間靈性の最も大なる誤謬迷妄である、自ら神たらざるこそ罪惡である、自ら神たることを恐るゝのは、古來宗教

の誤るところで、人類の最も惡むべき最も耻づべき墮落の極と云はねばならぬ、耶蘇教徒が耶蘇を信じ、佛教徒が釋迦を信じて居るのは、差支もないことであるが、耶蘇基督にはどうしても及ばぬ、釋迦には如何にしても及ばれぬと自ら卑下して、輕侮するのは、人として最も大なる罪惡である、耶蘇を信するならば、之に及ぶと信じなければ、罪惡である、佛教を信するならば、釋迦に及ぶと信じなければ、罪惡である、耶蘇教を信じて、耶蘇に及ぶべからずと立つるのは、信仰ではない、眞正の信仰なるものは、我之に及ぶと信じて努力することである、單に努力するのみではない、眞に自ら耶蘇と成らなければならぬ、耶蘇の心を以て心となし、耶蘇の行ひを以て自ら行はねばならぬ、豫言者は、茲を云ふのである、耶蘇教徒よ、自ら耶蘇と成れといふのである、佛教徒よ、自ら

釋迦と成れといふのである、更に進んで汝が信ずる神となれといふのである、汝が信ずる佛となれといふのである、豫言者既に諸君に先じて神となつたのである、佛となつたのである、されば豫言者と同じく神たる、佛たる自覺を得給へと傳ふるのである、從來の宗教は人間を以て罪人の扱ひをした、六惡煩惱の塊物とした迷妄も極まるのである、今や天の父に罪惡の悔改を祈つて泣き叫ぶの時ではない、泣蟲の時代は既に去つた、罪を悔ゆるは可なり、泣くも可なり、されど更に自ら發憤向上して直に神とならねばならぬ、人々の本我、王陽明がいふ良知良能は直に神であるといふこと、宇宙の實在なる本我は即ち神であるといふことを自ら深く自ら切に自ら眞に自覺しなければならぬ、豫言者は既に自覺したから、諸君も之を自覺し給へと迫まる

のである、豫言者を見給へと申すのである、之を聞いて笑ひ、或は之を聞がざるものは亡びに任せよ、救ひの子等は讚美を擧げ、欣然歡喜して、無上の法悅を湛へて來るべきである、二千年以前既に釋迦基督は出現したり、二千年の日月を経たる今日、尙未だ釋迦基督出現し能はざるか、文華は開けたりといふか、文明は化しつゝ、ありといふか、釋迦耶蘇現はれて二千年、而して未だ再び現れ兼ねたる世界は如何に究乏ではあるまいか、徒らに古人を憧憬、渴仰して泣くことを知るの外、何等の行爲なき人類は罪惡ではあるまいか、かゝる究乏極まるかゝる罪惡劣等の世界は、一撃して粉碎するの優れるに如かずである、釋迦を思ふて泣き、耶蘇を追懷して仰ぐばかりの人間は、如何に臆病なる人間ではあるまいか、如何に劣等なる人間ではあるまいか、

豫言者は斯る臆病なる劣等なる人間、斯る罪惡なる毒疫なる世界を救濟せんがために現はれたのである。釋迦基督を二千年前に渴仰する臆病なる者よ、劣等なるものよ、來りて豫言者を見よ、基督よりも釋迦よりも優れるものである。釋迦よりも基督よりも大なるものである。若し一朝自覺の境に入つたならば、基督は直に諸君自身である。釋迦は直に諸君の心である。何となれば、人々の心は本來神であるからである。佛であるからである。豫言者は自ら心の證悟を披瀝して天下に叫ぶのである。之を疑はば、來りて豫言者を見給へ。我は火の柱の如くに立つて居る。彼の婦女子に鬚髯を加へたるが如き。耶蘇を思ふこと勿れ。十字架の耶蘇の氣魄は豫言者の如しであつた。彼の無氣力にして睡るが如き。佛像を思ふこと勿れ。咆哮せる獅子の如き。釋尊は豫言者の如し。

であつた。されば豫言者を見ると共に自らの衷に基督を見給へ、心の中に釋迦を見給へ、更に進んで神を見給へといふのである。根本的に神たるの自覺を得給へと叫ぶのである。

第二章 基督觀(一)

茫然たる一望、春來り、夏來り、秋來り、冬來るもさらに風致の趣をあらためざる荒寥の地、高からぬ巒峰は迤透として長蛇を横へ、至るところ其口を開いて呑んとするは洞窟の穿たれたるなり、風颯々として不毛實らずと雖も、人跡稀れなるだけ一種瞑想に適したるはヨルダン河の流れ込む死海の邊、エリコとエルサレムの間なるユダの荒野である。昔はエッセ子の徒が退隱した處で多くは洞窟に出入したものである。頃は紀元三十一年、バブテズ

マのヨハ子は豫言者としてこの地から出現した、身に駱駝の毛衣をき、腰に皮の帯をつがね、蝗蟲と野蜜を食物とせりと聖書中にあるが、随分異はつた風である、けれどもヨハ子は殊更に異風を裝ふた者ではない、古へエ、セ子の徒は此風であつた、地は凹寂の荒野に屬し、人は難行と苦行に勵み、専ら禁慾を奉じて瞑想到に耽つたエ、セ子の風である、世の論者多くはヨハ子を以てエ、セ子に關する無きが如く云ふ者ありと雖も、ヨハ子がエ、セ子に負ふ所は頗る大なる者がある、エ、セ子は方にヨハ子を産出すべき先考と云ふべき者である、寧ろ母といふべきである、エ、セ子を母とすればイザヤは當に父である、時代の大勢は其妻であらう、哲學者フロアの所説を見ても、大勢の熟したるとは明かである、ヨハ子は如斯にして生れたる荒野の産物である、

イザヤの豫言はヨハ子に與へられたる火の洗禮であつた、さればこそエ、セ子の徒が世の名利を棄て、清貧に甘んじ、山野にのがれ、洞窟にかくれ、難行苦行に身を清め、沈思冥想に心を高ふしたるに似もやらず、身命を賭して以て荒野に叫むだ以所である、ヨハ子は何を叫むだであらうか、

天國は近づけり、悔改めよ、蝮の裔よ、誰かなんぢらに來んとする怒を避べきことを告げしや、然ば悔改に符ふ果を結べよ、爾等われらが先祖にアブラハム有と云ふことを意ふ勿れ、我爾曹に告げん、神は能この石をもアブラハムの子と爲しめ給ふなり、今や斧を樹の根に置く、故に凡て善果を結ざる樹は斫れて火に投入らるべしと云ふのであつた、天國は近づけりとは何事であらうか、天國とは如何なる國であらうか、勿論宗教的の國に相違はな

いが、ヨハ子^三が叫び出す迄になつた天國の由來は如何であらう、
バビロン帝國を創立したる英傑子ブカド子ザ^一が、エルサレム
城を亡ぼして猶太人はバビロンに移住する事となつた頃は、紀
元前五百九十年であつた程なくヘルシヤ帝國が勃興してバビ
ロンを亡ぼしたので、猶太人は本國に歸ることを容るされた、け
れども其のまゝ、バビロンに永住したるものも多かつた、バビロン
の猶太人と稱せられたものである、本國に歸つた者は再びエル
サレム城を築いたが、バビロンの猶太人こそ大宗教の祖となつ
て、靈界の城を築いたのである、バビロン在來の宗教と、猶太人固
有の宗教と相融和して、大宗教を發展したのである、
アレキサンダー大帝の頃、埃及のアレキサンダー府には既に猶
太人が移住して、侮りがたき勢力を占めて居つた、大帝没後、トレ

ミーが埃及を支配した時には、大學は創立され、圖書館は設けら
れ、天下の文藝盡く集つた、アレキサンダー府はアゼンスの文明
をも凌がんばかりに至つたのである、此際猶太人を撰抜して、ヘ
ブライ原語の舊約聖書をグリニス語に翻譯せしめた、猶太人は
其頃から益々殖民を四方に試みたもので、當時文化の地は猶太
人の足跡を見ない處はないこととなつた、彼等は至る所寺院を
建て、其の固有の宗教を守つて禮拜を務めたものである、彼等は
本來宗教的種屬である、猶太人固有の宗教とは獨一神を拜む事
である、エホバの神を拜することである、獨一神を拜するがため
に偶像多神は罪惡として排斥したものである、ローマ帝國の勃
興するや、征討ごとに敵國の偶像を拉し來つて首都ヂュピター
の神殿に奉じたものであつた、されば世界統一の實行と共に宗

教の統一が行はれた、偶像多神は遂に獨一神に歸せざる可らざるを示されたのである、此時恰もギリ井スの哲學は思想の上から偶像多神の迷妄を破つた、多神教を否認して一神教を主張したのであつた、天下人心の向ふ所推して知る可しであらう、かくて猶太人の宗教はいよいよ大勢力となつたのである、さばれローマ帝國は文明の餘澤を縱まゝにして、弊毒既に膏肓に入つた、ローマ人の世界統一は容赦なく各國を征伐して、手當り次第財寶を掠奪したものである、加之屬國には苛税を課して聊か顧るところがない、甚しきは奴隸の賣買を始むるに至つた、敵國の民を捕へて奴隸とするのである、女性は容れて貴族の妻妾とするのである、斯の如くにして貴族社會は有らん限りの驕奢を極め、遂に牛乳を沸かして沐浴するに至つた、即位式の如き

は戰爭を演じて人民の觀覽に供したものだ、が、奴隸を用ひて實戦せしめたものである、鮮血川をなし骸骨山をなすの有様であつた、暴逆天に踰る、人心愈々恟々、さすがの奴隸も謀反するに至つた、國難茲に徴したのである、即ち猶太人の謀反である、ローマ人に對して激昂すると同時に、古來宗教上に含まれたる王國の理想、即ち天國の觀念が愈々痛切となつた、彼等が拜するエホバの神は猶太人のために、特に神の王國を降し給ふとのアブラハムが約束に對して、希求心が盛んになつたのである、遂には王國の實現を主張するものが續々輩出するに至つた、王國の希求心に伴ふ觀念はメシヤの觀念である、メシヤは、始め全然地上の王的であつたが、時代を経るに従つて一方にはまた靈的メシヤの觀念が成長した、メシヤは其來るを待つより外に致方もないが、

王國こそは人々自ら建てねばならぬと覺悟をした、されば王國、即ち天國を來たさんが爲に、兵を擧げて血を流したものすらある、天國はまた神の國とも云ふ、神の國は如何にして實現さる可きか、如何にしてといふ疑問の解決に就ては、猶太人も其の考がまち／＼で纏まらなかつたのである、

猶太人中にも數派に分れて、天國の實現に就ては各々其主張を異にした、サドカイと云へる教派はローマ政府と提携して、一身の榮華をのみ謀つたもので、天國の實現の如きは格別考へなかつたものである、パリサイと云へる教派は即ち猶太教の中心で、サドカイ派が貴族的なるに反して平民一般の屬する所である、ローマに服従するは愚か、ローマを轉覆して理想の王國を立てんとするのである、されば王國はエホバの賜ふ所であるから、王

國を建てんには須らく先づエホバに従はなければならぬ、エホバに従ふとはエホバの戒律を守ることである、戒律の大綱は古へモーゼに依つて示された、其の戒律を守るのは即ちエホバに従ふのである、エホバは其の信念を嘉みして王國を地上に賜ふといふ譯である、天上に於ては王國の準備がちゃんと出來て居る、エホバの聖旨にかなひさへすれば、忽ちにして王國は實現さる可きものと信ずるのである、他にユダの一派がある、之を正義黨と云ふ、パリサイ派の如く王國が天上より落ち來るものとは決して思はない、必や自ら建設すべきものとの考である、之を建設せんには血と刃とに待たねばならぬ、方に白刃を踏んで王國を建設するアラビヤ的マホメツト主義である、さればユダ黨は兵馬を驅つてローマに抗し、愈々破れて愈々堅く、其志遠く子孫

に及んだ、エルサレムの滅亡まで維持したものである、他の一派をエッセ子派と云ふ、エッセ子派は最も秀逸なる思想である、サドカイ派の鄙近にして榮華に耽るを卑み、バリサイ派の徒らに皮相のみに拘泥するのみならず、空しく天國の降臨を仰いで茫然たるを斥け、ユダの一派が國家的天國を建設せんとして凶器を用ゆるを否諦し、専ら天國を無形に觀念して、精神的なる心の衷に實現す可きものとした、斯くて清貧に安んじ、名利を棄て、禁慾苦行以て盛徳を修めたものである、エッセ子派こそは卓抜なる識見である、天國實現のために陰雲蒸しつゝ、あつたと云ふべきである、一旦風起れば蛟龍が飛ぶのである、果然イザヤは火を投じた、バプテスマのヨハ子は火の洗禮に浴びたのである、大風起て蛟龍躍る、今や洞窟に潜むの時でない、山野に退くの時でない、瞑想に

耽るの時でない、我が心の衷に築いたる天國を提げて、萬民の心に建てねばならぬ、ヨハ子は茲に於て立つた、天國の實現を叫んだ、イザヤの預言を以て色彩を施されたるエッセ子の天國を叫んだのである、エッセ子派の主張こそは眞正なる天國の實現であつた、古來猶太人の理想として最も明確なるものである、ヨハ子は即ち是が呼號者である、天國實現の先驅者は即ちバプテスマのヨハ子である、

第參章 基督觀 (二)

當時サマリヤにも一豫言者が起つて天國の近づけることを宣べた、蓋しサマリヤ古來の傳説を奉じたものである、サマリヤ人の考ではモーゼが携へたる法律の銘、マナの壺等の寶物は、まさ

しくゲリシム山に埋められて、天國の降臨と共に、是等の寶器は再び世に出づるものと信ぜられたものである。バプテズマのヨハ子がヨルダンの河邊に天國は近づけりと叫ぶの時、サマリヤの豫言者もゲリシムの山に登りて天國は近づけり、寶器此所に有りと呼んだのである。サマリヤ人は昔から天國の來る可き地はユダヤにあらで、サマリヤであると信じて居つた。アブラハムに約束せられた聖地はゲリシム山である。モーゼが神殿の寶器を埋めた山はゲリシムであるとの口碑であつた。サマリヤの豫言者は斯る信念から神殿の寶器を探つたのである。天國の來る可き前兆として寶物を發掘するが如きは、宗教上の平凡なる行動に止まるので、天國は近づけりの聲に動かされた凡俗の考である。天國を物質的に見るの甚しきものである。パリ

サイ派が徒手傍觀して天國の來るを待ち望むのと同一の誤謬である。猶太人はエルサレムの聖地を有するが爲に、寶物彼れ是れと立ち騒ぐの必要もなし、茫然手を拱して天國を待つたものだが、サマリヤ人に取つては古來の口碑が實現されて、ゲリシムは立ろに聖地となる譯であるから大騒をしたものである。自ら奮つて天國を實現すると云ふが如き高尚なものではない、劍戟を採つて戦を開き、自ら血を流して天國を建設する正義黨に較ぶれば同日の論ではない、況んやエッセ子派の高遠なる思想とは比較して云ふ可き限りでない。

サマリヤ人がゲリシム山に大寄せをしたのは、單に天國の近づける前兆として見る可きもので、又天國は近づけりの聲の如何に人心を動かせるかを見る可きである。バプテズマのヨハ子が

稱ふる天國はサマリヤ人等が考ふる如き天國ではない、實に精神的なる天國、人心の衷に見る可き天國である、且つ其の天國を來らせんには自ら勵まねばならぬとした、人々各々奮闘力行して天國を採る可きであると云ふのである、ガリラヤのユダ黨の如きではない、血を流して敵と戦つて實現するのではない、自ら己れの衷に闘ふて實現するのである、道德的征服である、悔ひ改めと云ふのは道德の克己的征服を云ふのである、

時代の暗雲は八方から起つた、獨り雷電風雨を藏するものは深山の雲である、エ、セ子派は深山である、バプテズマのヨハ子は雷電風雨に乗じたる蛟龍である、パリサイ派、ガリラヤの正義黨、サマリヤの豫言者等が天國を外形的に見るに反して、彼は之を心の衷に見た、心の衷に天國を見るのは由來エ、セ子派の主張であ

る、彼は直ちに之を天下に建設せんと試みた、パリサイ派、サマリヤ人が徒らに天國を夢想するに反して、彼は之が建設に着手した、天國の建設に着手したのはガリラヤの正義黨も同様であるが、敵國を征服して天國を建つてない、山中の賊を破つて天國を建つてない、心中の賊を破つて天國を建てるのである、自ら悔ひ改むる所に天國の建設があるといふのである、

ヨハ子は斯の如くにして天國の建設に着手した、ユダの荒野を出で、エリコに近きヨルダン河畔に叫びを始めた、道を聽かんとて集まれる人々に向つて、且つ叱り、且つ戒め、且つ教へて天國に導いた、怒つて去る者は之を追はず、泣いて悔ゆる者は之を容れて天國の同盟を組織した、天國同盟の入盟式として、ヨルダンの水を注いでバプテズマを授けたのである、耶蘇基督も來つて

バプテズマを受けた、バプテズマのヨハ子の名は之が爲である、今日に至る迄耶蘇教會が洗禮を施すのはヨハ子の遺志を継いだものである、斯て彼は天國の建設を實行したが、如何にして之を永續せしむるか、己れが力には限りがある、如何にして之を萬民に傳ふ可きか、己が壽命には限りがある、如何にして之を後世に傳ふ可きか、是等の問題は全く人力の及ばぬ所と考へてエホバの神に一任した様に思はれる、勿論彼は天國の事業にはエホバが必ず助力し玉ふと信じて居る、否、天國建設の大事業はエホバの事業である、己れは單に其の事業に參した迄の事であると信じて居た、

さばれヨハ子が胸中には、實は斯ることを考ふるの餘裕もなかつた、彼が考では天國の降臨は世界的大審判である、決して樂觀

すべき氣樂なものではない、大なる悲觀が横つて居るのである、獨り異邦人のみが火を以て燎るゝばかりでない、悉く吾が民を滅ぼし、悉く吾が兒女を奪ふの天國である、ノアの洪水の悲惨の如くに考へたのである、手には箕を持ちて其禾場を淨め、麥は歛めて其倉にいれ、糠は熄ざる火にて燬くべしとあるが如く、エホバの世界的大審判である、今や斧を樹の根に置く、凡て善果を結ぶる樹は斫れて火に投入らるべし、善き果を結ばざる木は斫られ、且つ火に投入らるゝのである、糠は熄ざる火に燬かるゝのである、禾場を淨めんとするエホバの如何に恐ろしきかを見よ、手に斧を提げて立てるエホバの如何に怒れるかを見よ、されば歛めらる可き麥たらんには、須らく悔ひ改めて善果を結ばねばならぬ、ヨハ子がバプテズマは是れがためである、

來るべき天國に伴ふメシヤ降臨に於けるヨハ子が觀念は、全く哲學者フ井ローの理想と相似て居る、彼が觀念としてのメシヤは禾場を淨めんとする審判官であつた、寧ろエホバの神力的に解した者である、されば我は爾曹を悔改させんとて水を以て爾曹にバプテズマを授く、我より後に來る者は我に勝りて能力あり、我は其履を提るにも足らず、彼は聖靈と火を以て爾曹にバプテズマを授けんとある、我より後に來る者とは決して耶蘇基督を云ふたものではない、古へエホバがモーゼに現はれたるが如く、天國建設に於けるメシヤもエホバとして現はるべきメシヤである、斧を提げたるエホバの審判官である、ナザレの耶蘇的メシヤの觀念は毛頭無つたのである、我より後に來るものとは耶蘇を指したものでは決してない、エホバ的の審判者の來るを云

ふたものである、されば彼が囚はれてマケラスの牢獄に在るや、偶々耶蘇がメシヤの宣言をしたと聽き及んで、直に其弟子を遣はし、來る可きメシヤは汝であるか、はた他に待つ可きであるかと聞かしたとあるが、單にエホバ的メシヤなるや否やを見せしめたまでのことである、若しナザレの耶蘇を來る可きメシヤと信じたものとしたならば、その弟子を擧げて悉く信ぜしむるのみか、ヨハ子自らも進んで之を信ぜなければならぬ筈である、メシヤ既に降つたならば己が任命も完結を告げた譯で、天國同盟も從つて解散しなければならぬ筈である、斯る傳説は後世の附會に過ない之を要するに天國建設の上に於けるヨハ子が意識の裏には、ナザレの耶蘇との關係としては更に何者も無つたのである、單に曾て天國同盟の加入者としてバプテズマを授けた

記憶が存したのみである、ヨハ子が囚はれたるを聴くや、耶蘇は始て天國は近づけりを叫んだ迄のことで、彼がメシヤの宣言をしたのはヨハ子が殺された後のことであつた、之を見てもヨハ子が獄中より弟子を遣はしたことの、愈々事實でないことが明らかである、

世の耶蘇教者中にはヨハ子の天國を目して有形的天國である、此所に見よ彼所に見よとの天國であつた、耶蘇の如くに心の衷を指したものではないとヨハ子を貶せんとする者もあるが、ヨハ子を距ること遙に舊きユゼ子派は、早く既に人の心の衷に築く可き天國を道破した、其の末流に出でたるヨハ子が之を知らないと云ふ筈はない、彼は之を知ればこそ天國の近きを叫んだのである、バプテズマを施して天國の同盟を結むだ譯である、エ

ホバの大審判を経て始めて天國は降るべきであるから、彼は之を待んがために大同盟を組織すると信じた、エホバの審判と天國の建設とは同一時であるからである、只彼れはノアの洪水の如くにして來らんとする天國と共に、エホバの大審判が焦眉にあることを信じて居たのである、一言にして之を云へば天國の來るは洪水の奔るが如く、沛然として來るものと信じて居つた、けれども決して有形的の天國とばかり信じたものではない、悔ひ改めにかなふ善果を結ぶ人々に依りて成立する精神的の天國を信じて居つたのである、人々は悔ひ改めて倉に歛めらるゝ、麥とならねばならぬ、バプテズマは之が爲である、彼が天國同盟はこの目的から組織されたものである、

さ。れ。ば。ヨ。ハ。子。が。天。國。は。精。神。的。に。見。る。と。同。時。に。一。方。に。は。有。形。的。

に見たものである。有形無形の兩様の天國であつた。有形的は俄然として來るべき突出的の意味を有し、精神的はその生長發展を意味する永久的である。俄然として來るべき有形的の天國は古來の豫言に徴するところであるが、永久なる生長發展を意味する精神的の天國はエセ子派の流を汲んだものである。突出的有形的と、永久的精神的なる兩様の天國は、耶蘇も同一の見解であつた。要するに來るべき天國に就ての見解は、耶蘇は寧ろヨハ子に學んだものである。彼が曾てヨハ子に受けたるバプテズマは、取も直さず天國の見解を授けられたものである。エセ子末流としての彼は、天國に於けるエセ子の理想を實現して直に之を天下に建設せんと試みたものである。エセ子派は自ら守る退嬰的の天國であつたが、ヨハ子に至つては進取的の天

國である。消極的に退かずして積極的に進むたのである。蓋しヨハ子が斯る豫言者の行動に出でたのは、全く豫言者イザヤに火の洗禮を授けられたからである。有形的突出的の天國は、こゝから出たもので、従つてその傳道が熱烈なる活氣を帯びた譯である。如何に彼がイザヤに感化されたかは、非常なものがある。イザヤの豫言を實現したものはヨハ子であらふ。荒野に於て叫び、洗禮を以て淨むるが如きは、イザヤの豫言を字義そのままである。野に呼べる人の聲あり、云く、主の道を備、その徑を直せよ、諺諸の谷は埋られ、諸の山崗は夷られ、屈曲たるは直く、崎嶇は易せられ、人をみな神の救を見ることを得んと云ふのは、イザヤの豫言であるが、野に呼べる人の聲ありとの一句は、實に後世をして酔はしめたものがある。ヨハ子はまさしく此の句に酔ふたものである。

る。彼れが豫言者として荒野に出で、大に叫んだのは、此の句の實現である。野に呼べる聲の一句が如何に人をして酔はしめたかは、當時名もなき五六の豫言者等がヨルダンの荒野に民を誘ひ、エホバに於けるモーゼのそれを試みたのを見て、も察せらるるのである。

尤も洗禮の意味は古來からイスラヘル民族中に行はれたものだが、こは單に改宗したる異邦人を淨むる迄の事であつた。ヨハ子^ハが洗禮は大にその意味を異にしたもので、天國同盟の入盟式であつた。イザヤが云ふ洗ひ淨めよの意味が更に想化されたものである。ザカリヤの如きはイスラヘル民族の爲に淨めの泉が噴出するとさへ豫言するに至つた。イスラエルの民をして罪惡より淨むるのは、天國を來らすべし第一の要件であるとは、古來

多く預言者が云つた事である。且つ水を以て淨むるの意味は何處の民族中にもあつたもので、獨りイスラエルに限つたものではない。水を以て淨むるのは人心自然の傾向である。ヨハ子が入盟式としてヨルダンの水を注ひたのは、預言から來たものとは云へ、また自然の人心に出たものである。さればこそ今日まで耶蘇教の中にも洗禮式が残らざるを得ぬ譯である。そも、洗禮の起原を尋ぬるに、始めイスラエル人が改宗したる異邦人に施したる水を以て、ヨハ子は之を入盟式に應用したもので、耶蘇が踰越の禮に因んで晚餐の聖式を遺したのと同様な譯である。さもあらばあれ彼が又如何にイザヤに心酔したるか、は彼れが演説を見ても解るのである。嗚呼蝮蛇の裔よ、誰が爾曹に來らんとする怒を避べき事を告げしや、然ば悔改に符ふ果を結ぶべし、爾

曹心に我儕が先祖にアブラハム有と意こと勿れ、われ爾曹に告ん、神は能くこの石をアブラハムの子と爲しむべし、今や斧を木の根に置かる、故に凡て善果を結ばざる樹は伐れて火に投入らる、也、衆人ヨハ子に問ふて曰けるは、然ば我儕何を爲すべき乎、答へて曰けるは、二の衣服を有る者は有ぬ者に分與よ、食物を有る者も亦然すべし、税吏もバプテズマを受んとて來り曰けるは、師よ我儕は何を爲すべきか、答へて曰けるは、定例の税銀の外に多く取ること勿れ、兵卒も亦問ふて曰けるは、我儕は何を爲すべきや、答へて曰けるは、人を強暴し、或は誣訴ふることを爲なかれ、得ところの給料を以て足りと爲べしと云ふのは、全くイザヤの句調其まゝである、

斯くまでに心醉しなれば、先人の精神を汲取ることは出来な

い、ヨハ子の如きはイザヤと呼吸相通じて朝夕相語ふの友となつたものである、かくてこそ始めて先人の遺志を實現することが出来るのである、イザヤ以來幾多の人々はイザヤ書を讀んだであらうが、未だヨハ子ほど色讀したものはなかつたのである、時代の渴望は天國の希求であつた、パリサイ派が茫然天國を夢想するとは云へ、心の中には火の燃るが如くであつた、サマリヤ人もその如しであつた、ガリラヤの一黨は既に宣戰を布告し、兵馬に訴へて建設に着手したのである、エッセ子派の消極的退嬰的とは云へ、禁慾苦行して自ら清ふし、自ら高ふし、以て天國の實現を勵むたものである、斯くの如くにして天國果して來るべきか、如何にせば天國を來すべきか、ヨハ子はイザヤに教へられた、火の洗禮を施されたのである、野に叫ぶ人の聲ありと、エッセ子派を

學んで沈黙すべきでない、洞穴に隠るゝでない、荒野に出て大に
 叫ぶべきであると、野に叫ぶ人の自覺を以て彼は蹶起した、かく
 て彼は自ら禁ぜず、イザヤの豫言を體現したのである、イザヤ既
 に偉大である、それが理想の豫言を實現するに至つては如何に偉
 大ではあるまいか、さればこそ、耶蘇も彼を讚歎して、凡そ婦の腹
 に宿りしものの中に、未だバブテズマのヨハ子より大なる人
 にあらじと云つた譯である、イザヤ書を色讀したるヨハ子は敢
 て自ら天國建設の雄渾なる事業に當つた、一イザヤの遺書すら
 猶且如此生命を齎らす可く大精神が含まれて居るのである、況
 んや幾多の豫言者が手に成つた舊約聖書の全部を色讀したら
 んには如何に大生命が湧くであらうか、思ひ半ばに過ぐるもの
 がある、古來の豫言者等は勿論幾多の人々は之を讀んだ、讀むに

は讀んだが、之を色讀したものは未だ曾て一人もなかつた、獨り
 ナザレの木工の子、耶蘇基督は之を色讀したのである、イザヤ書
 一卷と舊約の全部とは、當に以てバブテズマのヨハ子と耶蘇基
 督との産出の相違を見るべきである、深山の深きだけ、大澤の大
 なるだけ、蛟龍も亦従つて老成長大するのである、

第四章 基督觀 (三)

ヨルダンを隔てたる猶太の對岸ヘレアの地は、ローマ直轄にあ
 らざる大守領である、當時の大守はヘロデ、アンテバスであつた、
 キレアテ連山に近き高原に建てられたるリピタス城に住んで
 居た、アンテバスは猜忌深き人物で、又横暴を極めたものである、
 耶蘇の如きはアンテバスを目して狐と呼んだほどである、狐な

るアンテパスは狐の如くに不倫の行爲を敢てした、曾てローマに趣き其兄弟なるヘロテ、ペータスの家に寓した、この際ペータスの妻ヘロテヤと密通をしたのである、リピタス城に歸るや己が妻アレタスの女を離別して、彼の女を迎へんと互に約束をした、元來ヘロテヤは淫奔の血統を受けたる者で、其素質既に汚れたものであつた、やがてヘロテヤとアンテパスとの關係をアレタスの女に密報した者が有つたので、彼の女は直に父アレタスの許に逃げ歸つた、父の家に達した時には、既にアンテパスからの離縁狀が着して居た、ヘロテヤは夫を棄て、娘サロムと共にアンテパスの許に行いた、

ヨハ子はユダの荒野を出で、ヨルダンの畔、エリコに近き處まで進んで天國を叫んだが、更にヨルダンの河を渡り、深く大守

領に入つて悔改の叫を擧げた、ユダの荒野より従ふもの、エリコの平原より尾するもの、其他四方より集まり來れる人民を率ひ、リピタス城を距ること四五哩の地をトして天國同盟の露營を張つた、アンテパスは城中から之を眺めて居る、朝夕之を見て其勢の大なるに恐れを抱いた、やゝもすれば禍亂の端を開かん事を怖れたものである、次第によれば決する所有らんとて親しく天國同盟の露營につき、群衆に混じてヨハ子が演説を聽いた、聽衆の胸裏も貫かんず、辯士の銳眼は忽ちアンテパスに觸れた、眼光は紫電の如くに輝いた、霹靂直下アンテパスを粉碎した、偽善なるものよ、不義なる者よ、姦淫する者よ、熄へざる火に投入らる可きアンテパスよと、彼は戰慄して一たび縮み、憤怒して再び脹れた、面譴に逢ふたる彼は一旦良心に責められたが、やがて自ら

心を鬼となした、蓋し法律の嚴禁を破つた彼が不倫の行爲に對しては、有ゆる神罰と、反亂と、復仇とが降るべきである、親戚はこれが爲に排斥し、人民はこれが爲に激昂したのである、されば豫言者の面譴に觸れては自ら憤怒するのみか、大に民の禍亂を恐れたものである、兵を遣はしてヨハ子を捕へ、マケラスの獄に投じた、マケラスの山堡たる、仰いで子ボ一の山を望み、俯しては死海の水を瞰み、斷崖を踏んで峭立するところ、人烟稀に、荒蕪閑に、モーゼの遺墳ありとさへ傳へらるゝ靈地である、ヨハネ俄に捕へられて天國同盟は燈を失したるが如く、其徒も一時は随分狼狽をしたが、信念健固なる彼等は敢て聊も失望はしなかつた、弟子等はマケラスの獄中に出入するを許されて、自由_ニ往來したものである、アンテバスはヨハ子を捕へは捕へた

ものゝ、民の思惑を恐れて殺す積は毛頭無つたのである、蓋し人民はヨハ子がバプテズマを以て天より出でたるものと信ずるからである、アンテバスも追々と自然獄中なる偉人の感化を受けて、施政の上にも影響が及ぶ程であつたが、意外のことから殺さねばならぬはめとなつた、頃は秋の初つかた、アンテバスはテペリアスの即位紀念の式を行はんとて、隣邦の君主を招き、文武百官を集めて宮中に長夜の宴を張つた、宴酣にして小女サロムは、胭脂濃裝、翩々として歌舞を演じた、賓客の喝采は云はずもあれ、親のつもりなるアンテバスは酔ふたまぎれの機嫌斜に、褒美は望みに任せとらせん、何なりとも所望せよとサロムを撫して約束をした、稚な心に飛立つサロムは、母に走りて御意を傳へた、サロムは再びアンテバスの前に立た、どうかバプテズマのヨハ

子が首を載きたいと申出でた、アンテパスは驚かざるを得ない、
 はたとばかりに當惑したが、のつびきならぬ手詰めの所望、遂に
 ヨハ子が首を斬つた、蓋しヘロデヤがヨハ子を憎み怨むの甚し
 き、血を見ずんばやまなかつたからである、
 出來事の原因があまりにあどけなくて小説にも似て居るが、古
 代の宮中にては得て少なからぬ事實である、ヨハ子の横死は忽
 ちに傳へられて、天國同盟は柱を失ふが如くに動き、民は父を失
 ふが如くに泣き、猶太、サマリヤ、ガリラヤに傳はつた、初めヨハ子
 が捕はれてマケラスの獄中に投ぜらるゝや、耶蘇基督は直に立
 つて天國の宣傳をした、蓋しヨハ子の遺志を繼ぐの考へであつ
 た、今やヨハ子の血を聞いて骨は鳴り、肉は跳つた、萬感群つて心
 緒亂る、即夜急にガリラヤ湖邊に退いた、蓋し沈思冥想の爲であ

る、義なるアベルの血より、バラキアの子ザカリアの血に至るま
 で、凡て流し、義人の血は聖書を染めて斑々たるも、現にヨハ子
 が血を目撃しては、感激痛烈、彼は天國宣傳の將來を默想したの
 である、この旬日の默想こそは、耶蘇基督をして彪變せしめたも
 のがある、取も直さず崇絶なる自覺の端を啓いたのである、豫言
 者ヨハ子既になし、誰か遺業を繼ぐべきものぞ、ヨハ子が精神は
 肉と共に亡ぶべきか、悔改のバプテズマは水の泡と消ゆべきか、
 我は遺業を繼ぐべきにあらざるか、外に現はるべきにはあらざ
 るか、世は眠れり、人は死ねり、我を捨ては其人なし、古來の豫言は
 空望に非ず、我身にこそ應ふべけれど、天職の自覺は煥然として
 光つた、烈たり、赫たり、ヨハ子が碧血、豫言者ヨハ子の横死こそ、實
 に耶蘇基督が大覺醒の動機である、

耶蘇が冥想ごとにガリラヤの湖邊に退いたのは、湖邊の風致と
 顛趣とが、嘆賞厭くを知らざるものが有つたからである。晩湖寂
 寞蒼然たる暮色に消へゆくところ、轉た地上を忘れしむるもの
 がある。殊にヨハ子^一が横死の頃は、山野秋色を帯びて風いよよ
 清く、雲いよよ高く、湖面夕照を宿して波さららに濃かに、水さら
 に淡はし、夜は深ふして湖心月を沈め、水光たへに虹を横たふ、自
 然が果して何事を囁いたか、思ひやるだに云ひ知らぬ感が浮ぶ
 ではあるまいか、さもあらばあれ耶蘇がガリラヤを愛したのは、
 獨り湖邊の風致ばかりではなかつた、その人情風俗をも愛した
 譯である。ヨハ子の幽囚を聞いて、直に天國を宣べ傳へたのもガ
 リラヤ湖邊であつた、彼が弟子等の多くも湖邊の漁夫であつた、
 彼が傳道の本陣も勿論湖邊であつた、蓋しガリラヤ人は心清く

して恬澹直に信じ直に行ふ勇敢なる種族である、直情徑行にし
 て創業革命の志氣がある、耶蘇もガリラヤ人だけ大にガリラヤ
 風があつた、ガリラヤ風は熱烈にして死すとも悔ひざるの風で
 ある、現にユダの一派正義黨の如き、直に劍戟を提げてローマに
 抗じ、血を濺いで天國の建設を企てた、ユダが兄弟の如きは耶蘇
 と相前後して矢張り十字架上に斃れたのである、ヨハ子が天國
 を叫んだ年、即ち紀元三十四年の秋、假舎の祭として、イスラヘル民
 族の漂流時代を紀念するために行ふ一週間ばかりの祭がある、
 此時エルサレムの神殿でローマ人と衝突をして、血を以て至聖
 所を汚したのもガリラヤの參拜者でないか、アントニヤの守備
 兵のために劍を以て刺殺され、鮮血を祭壇に浴せて、供物の畜類
 ともに犠牲となつた、また耶蘇が捕へられむとする時、兵卒の耳

を斬つたベテロはやはりガリラヤの産である、ガリラヤ人の氣質はアラビヤ人の氣質に甚だよく似たところがある、蓋しモーゼの精神を受けたものである、モーゼがエホバを以て萬軍の主と呼び、血を喜ぶの軍神として矢石攻伐、忽ちにして劍光、忽ちにして鐵馬、カナン七國の如きは、これがために滅亡に及んだ、耶蘇はこの熱烈を化育して、平和的精神に向はしめむとしたのである、マホメツトの如きは左手にコランを抱き、右手に劍を提げて、道を傳へたが、耶蘇は兩手を舉げて、専らバイブルを捧げしめんとしたのである、さればとて、耶蘇は敢て劍光を避けて逃るののではない、自ら劍戟を提げざるまでのことである、我が來るは世に泰平を出さんと、あらず、劍を出さんがために來りて、いとなれば、劍光を犯し、血を踏むて進むの覺悟がある、献身犠牲

の精神である、彼が十字架は即ち是であつた、蓋し豫言者の本領は茲であるからである、バプテズマのヨハ子は斯の如くにして、斃れた、耶蘇が飄然湖邊に退いたのも、之を思ふて、愈其覺悟を決せんがためであつた、それはヨハ子が偉業を繼がんと爲に、身命を賭してかゝつたのである、正義黨のユダ常に曰く、人々須らく身命を抛つて、神に従ふべし、神と俱にあらんには、須らく身命を抛つべしと、基督、耶蘇もまた曰く、十字架をとりて、我に従はざるものは、我に協はざるものなり、その生命を得るものは、之を失ひ、我ために生命を失ふ者は、之を得べしと、ガリラヤ人が祭壇の横死は無意味なる一朝の出來事にすぎないが、耶蘇、基督の十字架こそは、まことに意味ある、生命ある、宇宙の祭壇に備へられた犠牲であつた、

第五章 基督觀(四)

基督耶穌はガリラヤの小邑ナザレの村に誕生した、父はヨセフ、母はマリヤである、ヨセフは大工を職として渡世をしたものであるから、耶穌も幼少の折から大工を仕込まれたことは、彼が演説に散見する比喩等に徴しても察することが出来るのである、三十歳にして而して立つまでは、専ら大工を業としたものらしい、ヨセフは如何なる人物であつたか、これを知るに據る所もないが、母マリヤは頗る賢明の婦人であつたらしい、敬虔篤信の人であつたかと思はれる、耶穌がことは申すまでもないが、其兄弟ヤコブの如き、エッセ子派に屬して苦行禁慾を力行したところから見ると、家庭の風と、母の氣質を思ひやらるゝのである、

年三十にして、バプテズマのヨハ子に來り、洗禮を授けられた、天國同盟に入つた譯である、偶々ヨハ子獄に囚はれ、耶穌大に感ずるところあつて、荒野に退き、長冥想を試みた、聖書の記する所に依れば四十日四十夜、食ふ事をせず後うゑたり、試むる者かれに來りて曰けるは、爾もし神の子ならば命じて此石をパンと爲よ、イエス曰けるは人はパンのみにて生るものに非ず、唯神の口より出る凡の言に因ると録されたり、是に於て惡魔かれを聖京に携へゆき、殿の頂上に立せて曰けるは、爾もし神の子ならば己が身を下へ投よ、蓋なんちが爲に神その使等に命ぜん、彼等手にて支へ、爾が足の石に觸ざるやうすべしと録されたり、イエス彼に曰けるは、主たる爾の神を試むべからずと亦録せり、惡魔また彼を最高き山に携へゆき、世界の諸國と、その榮華とを見せて、爾も

し俯伏て我を拜せば、此等を悉なんちに與ふべしと曰ふ、イエス彼に曰けるは、サタンよ退け、主たる爾の神を拜し、惟之にのみ事ふべしと録されたりとあるが、耶蘇が胸裏の煩悶を描いたものである、バプテズマのヨハ子はエッセ子派から出たので、大いに斷食苦行を行つたものであるが、耶蘇とても猶太の風として折々は斷食を行つたものである、斷食すること四十晝夜に及んだものだから、空腹になつて餓へつかれた、傍らにころがつた石を見て之が食へそうなものだと思へた、古ヘイズラヘルラビヤの民族がアラビヤの曠野で饑渴に迫まつた時、神はマナを與へ給ふた、されば此石がマナとなり、そうなるものである、やがて彼は眞生命に思ひ至つた、人はパンのみにて生くるものに非ず、更に彼は肉體の自在に就て考へた、エルサレムの神殿の屋根から飛んだならば

肉體を傷ふであらうか、立ろに粉碎されるであらう、肉體は自在なものである、眞の自由は獨り心靈に存することを覺つた、更に彼は物質の慾望を思ふた、此世の榮華と富貴とを思ふて心頗る亂れた、心靈を捨て、物質に従ふ可きか、物質の空觀に覺めたる彼はやがて眞生命に立返つた、サタンよ退け、主たる爾の神を拜し、只之にのみ事ふ可しと、心靈の無上尊を認め、斯くて大悟徹底したのであつた、彼が煩悶に就いては是丈しか書いてないが、實はヨハ子が囚はれてから刺激を被つたもので、彼が冥想の根本は、専ら天國宣傳の使命に就て深く思ひを凝したものである、一旦大使命を感じたる彼は、氣魄さながら長霓の如しであつた、直に湖畔カヘナウンカヘナウンに出、天國の宣傳を叫んだのである、故郷に尊ばれざる豫言者は、其後ナザレに歸つて、一日會堂に出

で、演説を試みた、鬚髯を撫して壇に登つた、イザヤ書を啓いて読み且つ曰く、主の靈われに在す、故に貧者に福音を宣傳ん事を我に膏を注で任じ、心の傷る者を醫し、又囚人に釋ん事と、醫者に見させん事を示し、又壓制らるゝ者を縦ち、主の禧年を宣播んが爲に我を遣せり、更に聲を勵まして曰く、此録れたる事は今日なんぢらの前に應り、爾曹かならず我に諺を引て醫者みづからを醫せ、我濟が聞し所のカペナウシにて行し事を、自己の家郷なる此土にも行べしと云ん、我まことに爾曹に告ん、豫言者その家郷にては敬重るゝ者に非ず、エリヤの時三年と六ヶ月、天とちて徧地おほいなる饑饉なりし、其時イスラエルの中に多の瘡ありしかど、エリヤは其一人へだに遣はされず、只シドンなるサレバタの一人の瘡に遣されたり、また豫言者エリシヤの時に、イスラエ

ルの中に多の癩者ありしかど、其一人だに潔られず、惟スリアのナーマンのみ潔られたりと叫んだので、聽衆は大に怒り、蜂の如くに騒ぎ立つて耶蘇を捕へ、村の外まで引ずつて、山の崖から投げ落さんとした、

由來豫言者古郷に尊ばれず、尊ばれざるを知りつゝも古郷に於て口を啓いた、日蓮の如きもそうであつた、彼は十有五年の間修業を積んで、一旦古郷安房の國小港に歸つた、曾て入道したる清澄寺に於て七字の題目を稱へ、四個格言を喝破した、聽衆の老若驚いて狂と呼び、うぬ外道の賣僧めと、教壇から引ずり降してしたゝか撲つた、僧等怒つて破門を宣告するやら、法衣を引裂くやら、東條左衛門の如きは刀に手をかけて斬棄てんとした、日蓮は命からく、鎌倉さして落ち延びた、アラビヤのマホメツトがへ

ウの洞窟を出て、サファの丘上に其使命を宣べたときにも、聽衆は蜂起して土石を投じ、罵詈譏して演説を妨害した、其妨害の張本人はマホメットの伯父アブラハブであつた、現代の世界的から云へば日本は我が古郷である、豫言者メシヤブダも古郷に於ける豫言者の格言に漏れなかつた、曾て東京靈南坂の會堂で豫言者の宣言をしたことがあつたが、牧師は狂と呼んで罵り、聽衆は忽ち總立ちとなつた、青年は跳り掛つて豫言者を門前に引ずり出した、我は已むを得ず青天井の下に於て演説を試みた、今日豫言者の出現は汝等の幸福である、それに何ぞや目前自ら宣言する、豫言者を拒まんとはする、目ある者は見、耳ある者は聽、汝等は曾て汝等の主と呼ぶ豫言者耶蘇を石にて撃ち、棘の冠をかむらせ、十字架につけて殺したる、バリサイ、サドカイの徒に

ついで讀まざるか、汝等は云ふであらう、我輩もし豫言者耶蘇の時代に居つたならば、其弟子となりて耶蘇に従ひ、バリサイ、サドカイの仲間には反對したであらうと、亡びの子等よ、汝等は古へ猶太人が耶蘇を苦しめたる如く、今また我を苦しめむとするか、バリサイ、サドカイの徒たらむとするのであるか、耶蘇を信ずるの信あらば、メシヤブダをも信ぜよ、我は心靈救済の爲に現はれたのである、宗教の王である、耶蘇基督以上の豫言者である、目あつて見るものは見るべし、耳あつて聽ゆる者は聽くべし、汝等は水のバプテズマを願ふか、我が與ふるバプテズマは血である、汝等悔改めて我を信ぜよ、破れたる靴は脱き棄て、我に歸せよ、然らば永遠の生命を得るのであると叫んだ、超絶の使命に對して己れ狂愚なる凡俗が、反つて狂愚を以て迎ふるのは、古今の通患

である、ナザレの會堂に於ける耶蘇、清澄寺に於ける日蓮、サファ
丘上に於けるマホメツトの心情は、豫言者が靈南坂會堂に於け
る心情と恐らく同様であらうが、人心の頑迷にして曲れるを歎
ずると共に、愈々使命の重且つ大なるを思ふのみである、

マホメツトは伯父の反對を受けて妨害を加へらるゝに至つた
が、耶蘇の如きも家庭の反對を免れなかつた、母マリヤ及び兄弟
等は、彼が發狂したものと思つて演説中に捕へに來たことがあ
る、道が賢明のマリヤも、超絶の使命に對してはなかくに解り
かねたものである、遂には之を信じたが、初めの程は狂人扱ひに
したものである、古郷近隣の人は猶更であつた、彼は大工の子で
はないか、其父はヨセフである、母はマリヤである、兄弟はヤコブ、
ヨセ、ユダ、シモンである、其姉妹もここに居るではないか、狂か、愚

か、忌くしい奴だと云ふ譯で、耳を傾けて聽かうとする者もな
かつた、つまり取合はなかつたものである、

耶蘇は其後湖邊カヘナウンに出で、再び天國の宣傳に従事し
た、程もなくヨハ子の横死が傳はつて、耶蘇は直に湖上の綠野に
退いた、彼が崇絶の覺醒は此の時に啓いたのである、留まること
十有餘日、再びカヘナウンに出で、天國の宣傳をした、耶蘇が天
國の觀念、即ち天國が精神的なること、人々の心の衷に天國を認
めて、自ら勵みて天國を採る可き事はヨハ子から學んだもので
ある、彼はバプテズマのヨハ子の時より今に至るまで、人々勵み
て天國を取らんとす、勵みたる者は之れを取れりと云つた、また
此に視よ、彼に視よと人の言ふべき者にも非ず、夫神の國は爾曹
の衷に在り、期は滿てり、神の國は近づけり、爾曹悔改めて福音を

信ぜよと云つたのである、ヨハ子は天國に入らんためには、まづ罪惡を悔改めて自ら勵まねばならぬとした、蓋し天國の實現さるゝ時には、必ずエホバの大審判が行はるゝものと信じて居た、天國は近づけりとは、大審判が近づけるを云ふのと同じことである、今や斧を樹の根に置かるとは、大審判の近きを云ふたものである、天國は近づけり悔改めよとは、樹の根に置かれたる斧に對して善果を結ぶ可きを云ふたものである、斯て大審判と天國とは同一の意味となるのである、こは勿論舊約の豫言から來たのであるが、基督耶蘇も天國の近きと共に大審判の近きことを信じて居た、大審判の行はるゝ有様は、ヨハ子よりも一層嚴格に觀察した者である、人の子己れの榮光をもて諸の聖使を率來る時は、その榮光の位に座し、萬國の民をその前に集め、羊を牧者の

綿羊と、山羊とを別が如く彼等を別ち、綿羊を其右に、山羊を左に置べし、斯て王その右に居る者に云ん、吾父に惠まるゝ者よ、來りて創世より以來、汝等我が飢し時我に食はせ、渴しとき我に飲せ、旅せし時我を宿らせ、裸なりし時われに衣せ、病しとき我を見舞ひ、獄に在しとき我に就ればなり、是に於て義者かれに答へて云ん、主よ、何時なんちの飢たるを見て食せ、また渴たるに飲し、か、何時主の旅したるを見て宿らせ、又裸なるに衣しや、何時主の病、また獄に在を見て爾に至しや、王こたへて彼等に云ん、我まことに爾曹に告ん、既に爾曹わが兄弟の最微者の一人に行ひしは、即ち我に行しなり、遂にまた左にをる者に曰ん、罰せらるべき者よ、我を離れて惡魔と、其使者の爲に備たる熄ざる火に入よ、蓋はなんちら我が飢し時我に食せず、渴しとき我に飲せず、旅せし時わ

れを宿らせず、裸なりし時われに衣せず、病また獄に在りし時われを顧ざれば也、是に於て彼等また答へて曰ん、主よ、何時なんちの飢、また渴き、また旅し、又裸、また病、また獄に在を見て主に事ざりし乎、其とき王答て彼等に曰ん、我まことに爾曹に告ん、此最微者の一人に行はざるは、即ち我に行はざりし也、此等の者は窮なき刑罰に入り、義者は窮なき生命に入るべしと云ふのを見ても、如何に嚴格なるか、解るのである、

天國の近づいたのは大審判が近づいたのである、大審判の近づいたのは世の末日が近づいたのである、世の末日とは何であるか、エデンの園以來、人類の汚されたる罪惡の一切が亡ぼさるゝの時である、エホバの大審判は之がためである、斯くて天上の國が地上に降るのである、天國は即ち是である、天上と、地上とを通

じて神の國となるのである、一旦末日の至るに當てや、悔改めて心に天國を築くものは其まゝ、天國の人であるが、心頑曲にして悔ひざる者は、斧を以て斬られ、火を以て燎かるゝのである、斯くの如く天國の降臨と共に大審判が行はるゝとの信念は、耶蘇もヨハ子も同様であるが、審判そのものゝ權力に對する見解に至つては、頗る相異なるものがある、ヨハ子は審判を行ふ者はエホバである、と信じて居たが、耶蘇は自らエホバに代つて審判の任に當ることを信じて居る、天國建設の任務を提げて、一旦十字架の上に斃れ、神の子の榮光を以て再び地上に降り來り、審判の任を全ふす可きものと信じて居た、自覺の崇高なるものである、ここがヨハ子と耶蘇との大なる相違點である、メシヤとメシヤに非ざるものと相違點である、耶蘇は自ら天國建設に當る身であ

るから、末日審判の任をも己れに賜ふべきものと信じて居たものである。耶蘇がヨハ子に優りて遙に偉大なる以所は茲である。世の論者或はヨハ子を貶して、天國を有形的に見て居つたから小であるとか、耶蘇は天國を精神的に見て居つたから大であるとか、ヨハ子の神はエホバであつたから小であるとか、禁慾的であつたから小であるとか、耶蘇は神を天の父としたから大であるとか、神の子を稱へたから大であるとか云ふものが有るが、こは區々たる言ひ分である。ヨハ子と耶蘇との大小の差は、其自覺の高底の差である。耶蘇は自ら廓然としてメシヤの自覺を得た。これ實に古來の豫言者に冠絶する以所で、またヨハ子よりも遙に大なる以所である。

世の末日及び審判に就ての信仰は、古代の宗教としては免かれ

がたき信仰である。耶蘇基督の天才すらも免れなかつたところである。寧ろ彼が天才も此の信仰のために啓發せられた。彼が空前の偉業も此の信仰のために成就されたものである。蓋し如何に天才なればとて、天才も畢竟時代の子には相違ないからである。末日の審判、天國の降臨、如何に詩的ではあるまいか、神話の崇高も茲に至つて極まるのである。世の惡を憎み、人の罪を悲むの餘、天國の降臨を理想するのは、人心自然の希求心と云はねばならぬ。近年米國に起つたモルモン宗の如きは、現に末日の審判を信じて自ら末日の聖徒と稱して居る。世の末日には必らず耶蘇が神の子の榮光を以て、再び天より降り來り、審判を行ふものと信じて居る。現代の宗教に於てすら、末日審判の信仰今猶存するとせば、二千年以前の古代に於て、耶蘇が之を信じて居たのも亦

止むを得ざる次第である。

第六章 基督觀(五)

バプテズマのヨハ子が天國の近きを稱へて、悔改めに協ふ善果を結べよと叫んだのは、人々の性情の根柢を改めて神の聖旨に協ふ様にせよとの意で、即ち道德的行爲を勧めたものである、人々自ら勵みて天國を取れとはこの譯である、耶蘇教徒等は古へより兎角にヨハ子を貶せんとする傾向があつて、近代に及んで愈々甚しいものがある、ヨハ子が天國は有形的であつたとか、神政的であつたとか、善果を結ぶとは禁慾することであるとか、エホバを悦ばせん爲に煩瑣なる儀式を守るのであるとか、バプテズマは虚禮の始めであつたとか、様々なる非難をする、勿論ヨハ

子も其弟子等も、共に禁慾斷食をしたものであるが、耶蘇基督としても天國同盟に加入した頃迄は、やはり斷食を行ふたものである、四十日四十夜の斷食の如きは最も甚だしいものではないか、元來耶蘇が家庭からしてエッセ子派に屬したもので、思はれる、彼の兄弟ヤコブがエッセ子風の禁慾を奉じたところから、彼のヨハ子の天國同盟に走つたところは、エッセ子派の系統を察せらるゝ、後年パリサイ、サドカイを熱罵したるに反してエッセ子には寧ろ同情を持つたものである、そは兎も角も耶蘇が自ら道を傳ふるに及んで斷食を排斥したのは、勿論信念意識の上から來たものではあるが、そもく、また彼が實驗上より悟つたものである、四十日四十夜の斷食は正しく其の實驗である、禁慾斷食の徒勞にしていたづらに心身を疲らすのみなること、其の

有害無益なることの頗る甚敷ものあるを覺つた、以來彼は斷食を行はなんだのである、禁慾斷食に對し頗る反動を起したものである、其の昔釋迦牟尼は人生の解脱を思ふて密かに王舍城を出で、北方三四里、尼連禪河の東岸なる象頭山に入つた、當時婆羅門の學者等が稱ふるところでは、解脱の方法としては偏へに苦行斷食にありとした者である、釋迦も其の苦行の戒律を實行した、終には最も峻酷なる苦行をなすに至つた、一日に一麻、或は一米を食ひ、五日に一麻を食ひ、七日に一米を食ふと云ふ次第で、米と麻との外は何にも食はず、苦行難修、前後六年の長日月を經過した、初め苦業林に入るに當りては、婆羅門の學者が信ずる如く、苦行は以て解脱を得るの法ならんと信じたので、六年の久しき間一心に苦行を實踐した者である、血消へ、肉落ちて骨と皮ばかりになるまで實踐した、けれども解脱の上には何等の功も見へなんだ、茲に初めて苦行は決して解脱の法ならざること、解脱の眞諦は確かに苦行の外に存する事を看破したのである、心機一轉、直に去つて尼連禪河に下り身體の垢を洗ひ、遂に小女の憐みを受けて氣力を回復し、幾もなく菩提樹下に大悟を開くに至つた、印度は禁慾の本場で、猶太人などは想像も及ばぬところであるが、兎にも角にも苦行の多少に係はらず、禁慾の有害無益なることは明かである、釋迦も之を覺つたが、耶蘇も之を覺つた、既に之を覺つたる彼は禁慾の偽善を排せんがために、隨分極端なる行動に出た、安息日を犯して麥の穂を摘み食ふやら、稅吏の家に出入して酒を飲むやら、且つ酔ふやら、ヨハ子の弟子等は之を見て大に驚き、怒つて詰問したことさへあつた、後來ヨハ子の徒

が愈々禁慾に傾き、愈々儀式を奉じたるを以て、耶蘇教徒はヨハ
子¹を貶するの材料として彼を以て一步も猶太教を脱せざるも
のとなし、單に天國の近きを叫んだる保守家であつたと罵るの
は、苛酷の評と云はねばならぬ、日月久うして之に伴ふ弊害は多
少必ず起るものである、其餘弊を擧げて開祖を罵るとしたなら
ば、耶蘇基督とても非難は澤山に生じ來るものである、嚴酷なる
禁慾を守り、煩瑣なる儀式を奉ずるものは、耶蘇教中にも少な
らず見受ける、舊教徒の如きは最も甚敷ものである、基督耶蘇を
崇拜するの餘り、バプテズマのヨハ子を貶せんとするのは、世に
所謂宗旨根性と申すもので公平なる見解ではない、ヨハ子は禁
慾の以て神の聖旨に協ふものと信じて居たに相違ないが、彼が
悔改は耶蘇のそれと同じく人心の根本甦生を云ふたものであ

る、嚴格なる禁慾を奉じ、煩瑣なる儀式を守りて以てエホバの聖
旨に協ふものと信じたのは、當時の猶太人である、其積弊の極ま
るところ、偽善虚偽に陥り、到底救ふ可からざるの慘狀を呈した
ものである、耶蘇基督は慨然として之が革命を企てた、さればこ
そ、一般の弊風に反抗して、熱烈の餘、敢て極端なる行動を提げて、
革命の火を投じた譯である、猶太人が死を以て守る安息日を犯
しては敢て麥の穂を食ひ、當時最も憎まれ、最も賤められたる税
吏の家に入つては敢て酒を飲み且つ酔ふたのである、俄かに見
れば亂暴極まる振舞であつた、時人怪んで何故なれば、税吏や罪
ある人と共に飲食するかと、且つ質し、且つ詰り、且つ怒り、且つ罵
つたものである、耶蘇は之に答へて康強なる者は醫者の助を需
めず、唯病ある者これを需む、われ矜恤を欲て祭祀を欲ずといふ、

此は如何なる意か往て學ぶべし、夫わが來るは義人を招くために非ず、罪ある人を招きて悔改させんが爲なりと、機會ごとに意見を吐露したものだ、世人は反つて其行動の突飛なるに驚き、狂暴視して其眞意を解するものもなかつた、ここに於て耶蘇歎じて曰く、嗚呼我この世を何に譬へんや、童子街に座し其侶を呼び、われら笛ふけども爾曹おどらず、哀をすれども爾曹胸うたずと云ふに似たり、蓋はヨハ子來て食ふこと飲ことを爲されば、鬼に憑れたる者なりと人々言へり、人の子きたりて食ふことをし、飲むことを爲れば又食を嗜み、酒を好む人、税吏、罪ある者の友なりといふと、

蓋し耶蘇が宗教革命の根本は、其拜す可き神の意識の革命である、モーゼが教へたるエホバを打破して天の父を發揮するので

ある、エホバは禁慾と儀式を悦ぶの神であつた、天の父に至つては禁慾と儀式とを悦ばざるのみならず、之が爲に偽善虚偽に陥るを憎むのである、矜恤を好んで祭祀を好まざるの神である、是が眞義の實を擧げんがために、神の意識の根柢から打破してかかつたものである、彼は斯くの如くに革命的精神を以て天の父を叫んだ、天の父の意識を發揮して以てエホバを打破したものである、

耶蘇教徒等は天の父の觀念を以て、耶蘇の獨創に出でたる如くに思ひ、また斯く言ひなして教を傳へつゝ、あるのは甚だしき間違である、神を父と呼ぶのは豫言者イザヤが既に喝破したるところで、汝はわれらの父なり、アブラハムわれを知らず、イスラエルわれらを認めず、されどエホバよ汝はわれらの父なり、上古より

なんちの名をわれらの贖主といへりとある、されば當時に於ては學者祭司輩は勿論のこ、猶太一般の民衆の思想中にも神を父としたものである、約翰傳第八章を見ると、イエス曰けるは、爾曹もしアブラハムの子ならばアブラハムの行をおこなふべし、然るに今なんちらは神に聞きし眞理を告る我を殺さんと謀る、是アブラハムの行に非ず、爾曹は爾曹の父の行をおこなふなり、かれら曰けるは我儕は姦淫に由て生れず、只一人の父あり、即ち神なり、イエス彼等に曰けるは、神もし爾曹の父ならば爾曹われを愛すべし、我は神より出て來ればなり、夫われは己に由て來るに非ず、神われを遣し給へるなりとあるが如く、神を父と呼ぶのは一般民衆の觀念であつた、決して耶蘇の獨創と云ふが如きものでない、既に有りふれたる思想であつた、然りと雖も一般民衆は

斯る高尚の思想を持しながら、痛切なる天父の意識に醒むることが出来なかつた、蓋しモーゼが稱へたるエホバの律法に縛せられ、因襲久しふして、宗教心が盲目となつたからである、人之を問へば答ふることは出来もしやうが、一種の觀念に止まるのみで、未だ意識となつたものではない、耶蘇基督は之を意識したものである、父の觀念が痛切である、斯くまでに痛切なる意識を得たる彼は、神を見ること活ける父の如くであつた、尤もヨセフよりもマリヤの慈愛に浴したる彼は、寧ろ神を母と見るべきであつたが、諸先哲の喝破したるまゝ、之を父のみ呼んだものであつた、かくて彼が神を父と見るの眼を以て、天地萬有を見るに、其の感想たるや、一變せざるを得ない譯である、秋霜冬雪を出で、春風洋々、百花爛漫に入るの感がある、況んや人類を見るに於ては、

直に同胞の感である。神は父にして人は子である。父に對する子としての人々は互に兄弟姉妹である。こゝに於てか春風百花の愛に到着せざるを得ないのである。耶蘇教へて曰く、爾の隣を愛みて其敵を憾べしと言ふこと有は爾曹が聞きし所なり、然も我なんぢらに告げん、爾曹の敵を愛み、爾曹を誑ふ者を祝し、爾曹を憎む者を善視し、虐遇迫害る者の爲に祈禱せよ、如此するは天に在す爾曹の父の子とならん爲なり、夫天の父は其日を善者にも悪者にも照し、雨を義者にも義しからざる者にも降せ給へり、爾曹已れを愛する者を愛するは何の報賞があらん、税吏も然せざらん乎、安否を兄弟にのみ問ふは人より何の過れたる事かあらん、税吏も然せざらんや、是故に天に在す爾曹の父の完全が如く、爾曹も完全すべしと、されば彼が云ふ天國は、天父に對する神の

子供等の國を云ふのである、天國とはつまり愛の國である、此所に見よ、彼所に見よと云ふ可きものにあらず、神の國は汝等の心の衷にあり、己れの欲するところ之を人に施せ、天の父の完全きが如く汝等も完全くなれとの意義である、神を父とするの意識は、終にここまで到着す可きものである、然しながら神を父と意識したものは獨り耶蘇のみではない、豫言者イザヤは遠く既に之を意識したものである、近くは豫言者マラキの如き尤も明確なる意識であつた、イザヤは勿論偉大なる豫言者であつたが、マラキも亦理想崇逸なる豫言者であつた、勿論彼は舊約末代の豫言者であるから、滔々として流れ來る理想の泉水を掬して、是が綜合と醇化を得たのは自然の勢であらう、切に之を言へば、マラキは新約を産みたるマリヤである、祖先

にあらずして直接の母である即ち全く新約の現出を豫言したものであるマラキ曰く視よエホバの大なる畏るべき日の來るまへにわれ豫言者エリヤを汝等につかはさんかれ父の心にその子女を慈はせ子女の心にその父をおもはしめん是は我が來りて詛をもて地を撃ことなからんためなりと舊約の末卷然も大尾の豫言であるこの豫言を翫味すると新約の全部が既に悉く抱擁せられあるを見出すのである新約に對する母鷄にあらずして寧ろ一個の卵である卵は孵化して大飛躍を試みた耶蘇基督はこの豫言の現化であるエホバの大なる畏るべき日は審判の末日を云ふたものである豫言者エリヤを汝等に遣はさんとは來る可き審判の以前に於て偉人の出現を望むたものである神が人類を思ふの如何に切に如何に深く湧いてく溢る

るの至愛を見出すのではあるまいかバプテズマのヨハ子が起つたのは正しくこの偉人を自覺して應じたものである若しそれ父の心にその子女を慈はせ子女の心にその父を思はしめんといふに至つては如何に神韻崇絶の大理想ではあるまいか基督耶蘇のメシヤの自覺も詮ずるところ此心に外ならぬので豫言者等の千言萬語も遂にこの一句に及ぶべきでない十字架の偉業とても僅かに此の一句中に約し得て猶餘裕ありと云ふべきである

ヨハ子とてこの崇絶なる豫言の一句を讀まないものではな
い、またかゝる理想を會得し且つは抱懷せぬものではなかつた
が彼はエッセ子派の峻嚴なる見地からして人類の墮落と腐敗と
を見るや熱烈なる情緒は炎々として燃ゆるが如く父なる神と

子なる人との融和を思ふの暇がなかつた、當代の偽善と奸惡とを見ては、偏へに神の斧が閃くを見るのみであつた、基督耶蘇に於ては、そうでないものがある、彼れ生れて最も温かなる母マリヤの慈懷に成長した、地は、凹寂不毛の荒野にあらで、高爽快明の丘陵であつた、死海の近く、ヨハ子に於けるよりは、地中海の遠く、耶蘇に於けるの遙に濶大を見るべく、荒野の眺めを添ふなるギレアテ連山を併せて、北に遙にヘルモンの雪峰を望むのナザレが如何に雄大を見るべきではあるまいか、エズレルの平原は眼下に横はりて、朝な夕なに舊約の歴史を語りひ、ゲリシム山は床しくもエルサレムの天を聯想せしめ、聖地に於ける仰慕の情をして愈々濃かならしむるものがある、時に或は遠足を試みて湖畔に往來し、韻致縹渺たる樂園に逍遙することも屢々であつた、

されば自然が與ふる無聲の感化と、慈愛に浴する有聲の温情とは、彼をして直に父なる神を慕はしめ、子なる人を思はしめたるものがある、彼が性情は如斯にして發育したものである、長じて天の父を意識するに従ひ、愛の天國を理想するに至つたものである、然りと雖も、耶蘇が靄然たる性情も、世の奸惡人の偽善禍なる世相に觸るゝに及んでは、ヨハ子に映じたる眼底に歸つた、神の斧を思ひ、天の火を思ひ、神の怒を思はざるを得なかつた、我が來りて詛をもて地を撃ことなからんためなりとのマラキの豫言も、是に於て空望となつた、彼が晩年の演説中には、至る處にこれを見出すのである、彼が春の如き顔面は、漸くにして秋の如くに愁へ、冬の如くに悲み、遂に夏の如くに怒らざるを得なかつた、噫なんぢら禍なるかな、偽善なる學者とパリサイの人よ、蓋はな

んぢら天國を人の前に閉て自ら入らず、且いらんとする者を入をも許さざる也、噫なんぢら禍なるかな、偽善なる學者とパリサイの人よ、蓋なんぢら娼婦の家を呑、いつはりて長き祈をなす、之に由て爾曹最も重刑を受べければ也、あゝ禍なる哉、偽善なる學者とパリサイの人よ、蓋なんぢら徧く水陸を歴巡くり、一人をも己が宗旨に引入んとす、既に引入るれば、之をなんぢらよりも倍したる地獄の子と爲り、噫なんぢら禍なるかな、瞽目なる相者よ、爾曹はいふ、人もし殿を指て誓は、事なし、殿の金を指て誓は、背べからずと、愚にして瞽目なる者よ、金と金を聖からしむる殿とは孰か尊き、又いふ、人もし祭の壇を指て誓は、事なし、其上の禮物を指て誓は、背く可らずと、愚にして瞽目なる者よ、禮物と禮物を聖からしむる祭の壇とは孰か尊き、それ祭の壇を指て誓ふ

者は、祭の壇、および其上の凡の物を指て誓ふなり、また殿を指て誓ふ者は、殿および其内に在す者を指て誓ふなり、また天を指て誓ふものは、神の寶座、および其上に座する者を指て誓ふなり、噫なんぢら禍なるかな、偽善なる學者とパリサイの人よ、蓋なんぢら薄荷、茴香、馬芹の十分の一を取納て、律法の最も重き義と、仁と、信とを爾曹は廢、これ行ふ可きもの也、彼も亦廢べからざる者なり、瞽目なる相者よ、爾曹は環を漉出して駱駝を呑むもの也、あゝ禍なるかな、偽善なる學者とパリサイの人よ、爾曹盃と、盤の外を潔くして内には貪欲と淫欲とを充せり、瞽目なるパリサイの人よ、なんぢらまづ盃と、盤の内を潔せよ、然ばその外も亦きよかるべしとは、耶蘇が十字架の近まりし頃、エルサレムの神殿に於て怒號した演説の一端である、彼が傳道の初期に於てなしたる春

風・秋・月・の・如・き・山・上・の・垂・訓・と・は・全・く・其・趣・を・異・に・す・る・も・の・が・あ・る・
 バ・リ・サ・イ・の・學・者・偽・善・な・る・人・禍・な・る・世・に・對・し・て・は・豫・言・者・メ・シ・ヤ
 ブ・ダ・も・其・感・を・同・ふ・す・る・と・こ・ろ・で・あ・る・殊・に・理・想・と・現・實・と・の・相・違
 よ・り・し・て・茲・に・至・ら・し・め・た・る・彼・が・悲・憤・と・感・慨・と・は・最・も・同・情・に・堪
 ざ・る・も・の・が・あ・る・

第七章 基督觀 (六)

神を父とするの意識には、これが負帯の意識として人を子とするの意識が伴ふものである、耶蘇は父なる神に對して自ら子たるの意識が痛切であつた、神と己れとは父子の關係であることを意識したものである、されば常に自ら稱して神の子、或は人の子と呼んで居た、この痛切なる自己の意識を推して、人々は神の

子である、神の子として天の父に事へ、父の子たる人々は互ひに相愛すべく、以て天國をこの世に來らす可く教を宣へ傳へた、かくて耶蘇が神の子たる意識は向上に向上して、自ら神たるの觀念にまで到達した、取も直さず父と我とは一なりの觀念である、天地創造の神を信ずる猶太人の耶蘇にして、如何にしてか、崇高なる觀念にまで到達したか、勿論彼が神の子たる意識の向上に待つべきであるが、抑もまた向上の素因たるや深きものがある、彼はダビデの詩を透ふして、ダビデの心竈を穿ち、更に宇宙の妙音に觸れたのである、詩篇第八十二に曰く、我いへらく爾等は神なり、爾等は皆至上者の子なりと、耶蘇はこの詩を色讀したものである、體現したものである、猶太人が待ちに待つたるとき出現や、即ちアブラハムに約束せられたる神の國の來らんとし出現

す可きクリストに於て彼が自らクリストたるの自覺を得たる
 根柢は即ち詩篇なるこの一句である、アブラハム以來、バプテズ
 マのヨハ子に至るまで、凡ての豫言者とイスラエルの民とは、來
 る可きメシヤ、來る可きクリストに就いてエホバ自身の出現と
 信じて居たかゝる信念に基づく時代の希求心に應じて、耶蘇は
 破天荒にも自ら神としてメシヤなるクリストとして立つた譯
 である、民衆の否認は勿論、神を汚す僞豫言者として十字架の最
 後を遂ぐるに至つたのも、また已むを得ざる勢である、
 始め彼は詩篇を讀んで深く思ひを凝らした、我云へらく汝等は
 神なりとは神と人との一なること、即ち父と我との一なること
 を云ふたものである、やがてバロに於けること、神の如しとのモ
 ーゼの自覺に思ひ至つた、モーゼはバロに於ける神である、され

ばモーゼは神である、神なるモーゼはエホバである、エホバなる
 モーゼは則ち神である、と彼はエホバをモーゼの心の衷に見た、
 かくて天の父を己が心の衷に見出した、ダビデの詩の幽遠なる
 意味は、氷然として解せられた、自覺は忽ちに徹底した、曰く父と
 我とは一なり、曰く來る可きメシヤは即ち我なりと、さればこそ
 エホバに代りて自ら世の審判を行ふとの權威も、斯る徹底の自
 覺には自ら伴ひ生ず可きものである、

彼はこの自覺を宣言せんが爲に、エルサレムに上つた、神殿に於
 て猛然として我は來る可きクリストなりと宣言した、青天の霹
 靂である、驚いた猶太人は耶蘇を取圍んで詰問を始めた、汝がク
 リストならばクリストたるの證明をせよと、耶蘇はこれに答へ
 て、我なんぢらに告しかども爾曹信せず、父の名に託て我が行ふ

こと、われに就て證すなり、然れど爾曹信ぜず、此は爾曹に言ひし如く我羊に非ざれば也、我羊は我聲を聽く、われは彼等を識、かれら我に従ひ、われ彼等に永生を賜ふ、彼等いつまでも亡びず、亦これを我手より奪ふものなし、我に彼等を賜ひし我父は萬有よりも大なり、又わが父の手より之を奪うる者なし、我と父とは一なりと云つたので、猶太人は大に怒つて石を以て撃たんとした、汝は神を汚す者である、己れを以て神となすとは以ての外の事である、と騒ぎ立つた、耶蘇は聲をあげて爾曹の律法に、我いふ爾曹は神なりと録されしに非ずや、聖書は毀る可らず、若し神の命を奉し者を神と稱んには、父の聖別ちて世に遣し、者われは神の子なりと稱ばとて、何ぞ之を褻瀆ことをいふと曰べけん乎と答へた、以て彼が自覺の依て來るところを辿ることが出来るので

ある、汝等の法律に、我曰ふ汝等は神なりと録されしにあらずやと曰ふのは、正しくダビデの詩篇を指したものである、
斯の如くにして彼は自覺を得て以來、アブラハムに約束せられたる天國の偉業に従事した、其遣はさるべきクリストの自覺を體現したのである、つまり時代精神の理想を實現して是が完結を告げた譯である、されば父よ、時いたりぬ、爾の子なんちの榮を顯はさんが爲に、汝の子の榮を顯はし玉へ、これ汝われに賜し所の者に我永生を與へむが爲め、凡ての者を制むる權威を我に賜たればなり、永生とは唯獨の眞神なる汝と、其遣はし、イエス、クリストを知る是なり、我汝の榮を世に顯はし、汝の我に委ねし所の行は我之を成せり、父よ、今我をして汝と偕に榮を得させ給へ、即ち創世より先に汝と偕に有し所の榮を得させ給へ、汝世より

選て我に賜し人々に我汝の名を顯せり、彼等は汝の屬にして、汝之を既に我に賜ふ、彼等また汝の道を守れり、凡て我屬は汝の屬、汝の屬は我屬なり、且我れ彼等に由て榮を受く、父よ、汝の我に賜ひし者の我居るところに我と偕に在て、我榮、即ち汝が我に賜ひし者を見んことを願ふ、そは世の基を置きし先に汝我を愛したればなりとあるのは、後世の作かも知らぬが、兎も角も基督の基督たる以所を發揮して餘蘊なしと云ふべきである、彼が一神的エホバを信ずるの猶太人でありながら、父と我とは一なり、神と人とは一なりの觀念に到達したのは、最も偉大なりとしなければならぬ、勿論この觀念はダビデ既に之を喝破したる所で、印度に於てはありふれたる思想であるが、猶太人の耶蘇としては偉大としなければならぬ、エホバは始め人的の神であ

つて、アブラハムやモーゼとは親しく相面し、親しく相語つたものであるが、中頃に於て天外に飛び去つた影も形も見へなくなつた、耶蘇の時代に至つて漸く天の父と云ふ觀念が一般に普及したが、恰も見失はれたる父母を思ふが如く、其姿を見ず、其面を見ず、其聲を聞かず、子女は空しく追慕の涙にくるゝの状である、父母は遂に我が家に歸り來らざれば圓滿なる家庭を爲すことが出来ない、耶蘇は父母を心の裏に見出した、父と我とは一なりと覺つた、覺るは覺つても神の本體は我以外に有る、寫眞や書翰を手にしたるまでの事で、御本人は天外萬里のなかに居る風の便りに音信があるのみであつた、彼は父の聲を己れが心に聞きつゝも、其體は遙かに天外にあるとした、耶蘇がこの迷妄は死に至るまで脱することが出来なかつた、父と我とは一なるク

リス。トの自覺にありながら、十字架の最後に於ては神が己を見
 棄て給ふやを叫んだ。自覺に對する大なる撞着である。畢竟エホ
 バを天外に見る迷妄の致すところで、耶蘇も遂に猶太宗たるを
 脱せなかつた。
 由來猶太思想發展の傾向は、初め神を我以外に見る一神的に出
 で、さらに神を我が内に見る我神的に入る可き歴史上の必至
 であるが、耶蘇基督に至りて其中半に達したものである。父と我
 とは一なりと觀念しながら、神は猶我以外にある天外萬里の外
 にある現代の耶蘇教の思想も、これを脱することが出来ないも
 し、それ一神的を出で、我神的に入るまでを十里の路程と見る
 ならば、耶蘇教は今猶五里霧中に彷徨するものである。耶蘇が神
 の聲を己れが心に聞きつゝも、尙神が天外遙に嚴存するとの迷

妄は彼の凡ての宗教的事業と信念の上に影響を及ぼした。神の
 聲を心に聞きつゝ、尙ほ祈禱を止むることが出来なかつた。ゲッ
 セマ子に於けるが如きは、其最も甚敷ものである。又彼が根本事
 業たる天國に就ての思想に至つては、更に最も甚しきものがあ
 る。天國は此所に見よ、彼所に見よと云ふべきものにあらず。汝等
 の心の衷にありと一切抽象的に説くかと思へば、十字架の後に
 は神の子の榮光をもて白雲に駕し來り、末日の審判と共に天國
 を建設すべしとて、具體的に説くのである。天國は宗教的性情を
 指すかと思へば、又神政的形體を指すのである。天國は麩酵の如
 し、婦これをとり三斗の粉の中に納せば、盡く發出すなり。一粒の
 芥種の如し、之を地に播ときは、百様の種より微けれど、既に播て
 萌出れば、百様の野菜よりは、大くかつ巨なる枝を出して、空の鳥

その蔭に棲ほどに及なりとあるを見ると、永久の發達に期するもの、如く、我まことに爾曹に告げん、我に従へる爾曹は世あらたまり、人の子榮光の位に坐する時、なんぢらも十二の位に坐してイスラヘルの十二の支派を鞠べしとあるを見ると、天國の既に昨今に迫るもの、如く、既に建てられたるが如く、未だ建てられざるもの、如く、來るが如く、來らざるが如く、永久の發達なるがごとく、焦眉の革命なるがごとく、五里霧中に彷徨して歸する所を知らざること、蛙になりかけた阿玉杓子が尾を曳いて濁水に浮沈するが如き状態である、耶蘇没して二千年、形體的、神政的、突出的の天國が今に實現せられざるを見て、其迷妄は明かである、

抑も時代思想の發達は、世界歴史の發達と相待つ可きものである、

る猶太思想の歴史上に於ける必至の傾向は、印度の汎神的思想に觸れてはじめて發發す可きものである、神を我以外に見る一神の啓發を出で、神を我が内に見る我神的に入らんには、印度思想の思想とは、今や廿世紀の冠頭に於て相接觸しつゝあるのである、されば耶蘇教の啓發も既に遠からざるを察すべきである、耶蘇教が神を父と呼び、人を子と呼び、愛の擴張を稱ふるのは、宗教の最も骨髓を得たものであるが、たゞ神が天上から見張つて居ると信ずるのは、迷妄の甚しきものである、斯る迷妄が破却せられざる限は、宗教が活きて來ない、此の迷妄を破却して、猶太思想を活かすものは、印度思想である、されば、佛教は、耶蘇教を殺すものに非らずして、活かすものである、一般の耶蘇教徒が、宗祖の信

念を固守して居るのは急に致様もないが、苟も世道人心を導かんと任ずるの人は、大なる覺醒と、大なる徹底を要するのである。耶蘇教中にも斯る人物が出て、我以外に見るの神をして我が内に見せしめなければならぬ、所謂父と我とは一なりを發展向上せしめて、即ち神と人とは一なりの意識に達せしめなければならぬ、天外の神を破却して、全く心の衷に神を見せしめなければならぬ、抑も神は天外に在すものではない、己が心の衷に在すべきものである、猶太人の迷妄は神は天外に在すと信じて居た、耶蘇もさう信じて居た、此の迷妄からして猶太人は形體的の天國が俄然として降るものと思ふて居た、耶蘇もそう思ふて居た、けれども天國は俄然として降らなかつた、何時まで待つても降らなかつ

た、天國が俄然として降らないのは、神が天外に居ないからである、神が天外に居ない證據は、天國の降らざるを以て明かである、ある、されば耶蘇が半ば覺つたる心の衷に神が在することを、全部として覺らなければならぬ、我が心は即ち神である、我即ち神である、と覺らねばならぬ、斯る大徹底を得て天下に叫ぶの人物が、耶蘇教中から出づべき筈である、果せる哉、只一人出でた、露國の人トルストイである、彼は耶蘇が稱へたる天の父を解釋して、人間の靈性を指したものである、と云ふ、彼が解釋は耶蘇の意識の事實に照らせば、非難もあるが、眞理としては何所までも眞理である、如斯に彼が解釋をするのは、猶太思想發達の必至である、印度思想の啓發に觸れて到達す可き、耶蘇教に於ける歴史上の約

束である、トルストイが天の父を直に靈性と見て祈禱を全廢したる識見は、耶蘇がエホバを天の父と見て、凡ての虚禮虚式を排斥したる以來、最も大なる宗教上の革命である、耶蘇教徒は須らく速かにトルストイの主張を奉ぜなければならぬ、トルストイが主張の根柢を叩けば、耶蘇教と云はんよりは寧ろ世界教と云ふべきである、天の父を靈性と見て専ら博愛を主張するところ、耶蘇教中の生々たる萌芽が日光を遮ぎる天の父を排して、愈々成長し、愈々繁茂する譯である、

トルストイは斯く迄に崇高なる徹底に接したものの、悲しいことには一の大なる誤謬が横はつて居るのである、それは彼の禁慾主義である、彼は禁慾に非ざれば完全き愛を行ふことが出来ぬものと考へて居る、ここに於て彼は猶太人となつた、エッセ子の末

派に屬すべきものである、耶蘇は決して禁慾を主張せざるのみならず、大に之を排斥したものである、蓋し禁慾はエホバの神の悦ぶところで、天の父は決して悦ばざるところであるからである、天の父すら悦ばざる禁慾を提げて、トルストイは靈性に對する發展の要件とした、彼が靈性は禁慾を悦ぶの神である、靈性が再び古へのエホバに返つた譯である、苦行斷食にこれ日も足らざるエッセ子の徒に陥らざれば幸ひである、トルストイの靈性はエホバの神に逆戻りをした、彼は耶蘇教を踐外つして猶太教徒に落た譯である、只彼が博愛を主張するところに一縷の生命が存するのみである、然しながら禁慾を以て博愛の要件とするのは、博愛の博愛たる精神でない、禁慾を標榜するの博愛は博愛にあらずしてエホバ的強壓である、天の父の博愛には禁慾を認め

ざるのみならず、反つて之を排斥したものである。トルストイは日光を遮ぎる天の父は破却したが、直に生々たる萌芽の周圍に鐵柵を築いた風雨を怖れての警戒であらうが、愚も亦甚敷いのである。彼がこの愚を演じたのは勿論其性格にも依るであらうが、蓋し印度思想に觸れたる餘毒である。彼が印度思想に觸れて天の父を直に靈性と認めたまではよかつたが、かぶれた餘り禁慾主義までも持込んだ。禁慾主義は印度思想中最も厭ふべき思想のみか、東洋に於ては犬も食はぬ思想である。トルストイは物珍らしく之に觸れて心酔したものである。如何に禁慾に禁慾を行ひ、解脱を求めても解脱することが出来ない、玆に於て寂滅涅槃に至るのである。禁慾の終りは寂滅涅槃である。さればこそ苦行禁慾に次いで寂滅涅槃が置かれてあるのである。物珍らしい

シヨツペンハウエルは遂に寂滅涅槃を擔ぎ出した。トルストイも遂に寂滅涅槃に至らざれば幸である。彼は蟹を食ふてその甲をも呑んだものである。腸胃を破ぶるに至らざれば幸である。蟹の食ふべきを知つて甲の棄つべきを知らざる彼は、愚もまた憫むべしと云はねばならぬ。

之を要するに耶蘇は來る可きクリストの自覺に立つて、猶太宗教の根本理想を成就した。今日まで耶蘇教が各宗教の最高位を占めたのも、彼耶蘇が自覺の偉大なるからである。何を以て偉大と云ふか、來る可きクリストは神であらねばならぬ。彼は自らを神とした。父と我とは一なりの意識を宣言した。以て神と人とは一なりの觀念を呼び起した。是が爲に十字柱頭に擧げられて、血を流した。崇高なる自覺のために血を踏むで猶且つ悔ひなんだ

のである、彼が自覺は茲に於て確固不拔となつた、さればこそ此の自覺が生命となつて、大宗教が成立した譯である、今日からして之を見れば彼の自覺が如何に崇高にして、其人物が如何に偉大であるか、論評を挾むの餘地もないが、さて其當時に溯りて彼が如何に遇せられたかを見ると、頗る驚く可きものがある、其當時猶太に於ける歴史の大家ヨセフスは、果して如何に彼を観察したであらうか、彼が活動の前後を熟知したるヨセフスは、耶蘇を目して熱病一揆の張本人とした、又鷄鳴狗盜や、欺偽山師の一輩と罵つた、妄評も極まるではあるまいか、ヨセフスの如き歴史を書く程の人物であるから、一定の見識を備へたる人に相違はないが、而も救世主耶蘇を見ること、斯の如し、豫言者故郷に尊ばれざるの致すところであるか、そも亦あまりの偉大が時眼

に入らざるの致すところであらうか、それは兎も角もパリサイの學者等が十字架に釘けたる如く、ヨセフスは筆誅の十字架を加へたる譯である、嗚呼筆誅の十字架形を異にすれども、十字架の血は今も昔も流るのである、ヨセフスが批評を見る毎に、古人の叫きは香として、豫言者の耳朶を撲つのである、一たび無限の宇宙に刻まれたる生命は、宇宙とも、無限なるべし、暫しは消へて人の眼にかくるゝとも、いつかは萌出で、榮へぬ可し、生命の復活に疑ひを容る可けんや、パリサイの學者とヨセフスをして今の世にあらしめたらんには、彼等が不信だにも免るゝに道なからん、眼を開くと開かざると、そは人の自由なるべし、されど自ら閉ぢて暗きを好む者は禍也、曲れる世にも直き人あり、眠れる世にも醒めたる人あり、凡て眼は開かんことを欲し、醒めんこと

を欲す、開けかつ醒めたるは直き人の眼なるかな、それ生命は星の如けん、人の見ざればとて輝かざらんや、醒めたる眼は光を見む、悠久の世に明るき眼のなからざらんや、たとひとこしへに人の眼の暗かるとも、星は悠久に天に於て輝かん、

第八章 基督觀(七)

天國同盟に入つてから一旦ナザレに立歸つて居た耶蘇は、ヨハ子の囚はれたるを聞き及ぶや、即日發足してカペナウンに出で天國の宣傳をはじめた、彼はヨハ子の天國の後繼者として現はれたものである、彼がカペナウンを以て宣傳の地としたのは、親戚故舊の縁故からでもあり、又特にガリラヤ湖の風致と人情風俗とを愛したからである、ナザレからカペナウン迄は十里程の

道で、彼は少年の頃から屢々往來したものである、思想家たる彼がガリラヤ湖邊に冥想を凝らしたのは今に初めぬことであつた、ヤゴブとヨハ子の父なるゼベダイの如きは、耶蘇の伯父に當つたものである、叔母にあたるゼベダイの妻サロムは殊に彼を愛したもので、耶蘇が天國同盟に加入して、天國を宣べ傳ふる大教師として現はれてからは、心を傾けて之を崇敬したものである、其二子ヤゴブとヨハ子とは勿論耶蘇の弟子となつたが、サロム自身にも女弟子となつてしばく傳道旅行にも隨行したもので、彼れ此れと世話をしたものである、ヤゴブとヨハ子が其父ゼベダイ及び雇人と共に、一日船にありて網を引いて漁をして居たが、耶蘇は之を見て汝等來れ、人を漁るものとせんと云ひければ、二子は直に父と雇人と、網とを舟の中に打ち棄て、耶蘇に

從ふた、蓋し兼て母が崇敬する人でもあり、彼等自身にも崇敬して居たからである、之を見るとサロムも亦賢良の婦人であつたことが思はれる、

耶蘇が最も親密であつた家族は、之れもやはり漁者で、シモン及びアンデレの父なるヨナの一家である、耶蘇は常に此家に宿泊したものである、シモンは即ちペテロで、弟子となつた頃は既に妻を迎へて居た、妻の母もヨナの家に同居して居たものだが、篤く耶蘇を信仰した一人である、シモン夫妻は相携へて傳道の旅行に従ふたものである、耶蘇が母マリヤの如きは最も賢明の婦人であつたが、さすがに其子の真相は見えなかつた、忤が天國の宣傳を始めたと聞き及ぶや、發狂したものと考へ、之を捕へんとて其子女と共にカヘナウンに押しかけたことがある、大教師と

して他人が之を信するに引かへ、母は發狂と見て之を捕へんとした、子を知る親に如くはなしの父母は、却つて其子女を知るに難いかなである、豫言者故郷に尊ばれざるは此の譯からである、けれども一概にそうばかりでもない、他の一面には其真相を見出すことの、親戚故舊にあることも争はれない事實がある、耶蘇を最も初めに信じたものは、その故舊なるヨナとゼヘダイの家であつた、シモン、ペテロは先頭第一の信者である、マホメツトの如きもその伯父アブラハブの反對は受けたが、妻のカヂエは宣言を聞くと共に直ちに之を信じたものである、其婢僕と其從弟の如きも疑ひを容れずして之を信じた、メシヤブダの妻女光子の如きは、豫言者を尊ばざる故郷に生れたるにも係らず、猶且つ豫言者を尊び、信じて而して配したものである、

耶蘇が十二弟子とはシモンなるペテロと、其弟アンデレ、及びゼベダイの二子ヤコブとヨハ子と、税吏マタイ、クレオバスとマリヤの子なるヤコブと、レバイと呼ばれたるユダ、及びトマス、正義黨と名づけられたるシモンと、ベツサイダより來れるピリビ、及びイスカリオテのユダである、其外にマグダラなるマリヤと、ヨハンナ、スウザンナ等の五六の女弟子もあつた、是等の弟子はガリラヤ風の血性男兒であつたが、多くは皆漁人の家に成長したもので、教育はおろか無智亂暴なる青年であつた、耶蘇も彼等を教導するには隨分骨が折れたものである、彼等にして敏捷と云つたら綱を張るのと、船を行ふのと、空模様を見る位が關の山、それを教へて物質を超越したる心靈的の天國を了解せしめなければならぬ、殊に崇高なる宗教意識を頭から吹

込むのであるから苦心の程が察せらるゝのである、されば耶蘇も折りく、疝癢が起つた、頑迷極まる者どもかな、信仰が薄弱である、解りが悪い奴、人を思ふて神を思はぬとか、眞勇でないとか、臆病だとか、さんくんに怒鳴りつけたものである、嗚呼何時まで汝等を忍ばざる可からざるかと、長歎したことも屢々であつた、けれどもこは雨天の如きもので、また清朗なる天氣が打續いたものである、翻つて之を思へば魚貝の名目を知るに止まる漁人の子弟、崇高なる心靈的がさうく、急に解らう筈がない、例ひ理窟は解かつたにせよ、心靈の自得がない限りは信仰も強かる可き筈がない、まして日も淺き彼等のこと、思つて見れば無理もない筈、人は耳を掩ふて眞理を聞かず、逆さまに石を投じて抛つ世に、家を棄て、父母を棄て、我が許に馳せたる彼等、思ひやればそ

ぞろに同情が湧くのである。怒號の後には春風靄然、數行の紅涙すら進つた者である。彼等こそやがては世の光である地の鹽である。彼等を度するは世を度するのである。聊か苦情を思ふべけんや、不憫の情はいや増すばかりである。直情多血なるペテロにはケバと名づけて之を勵まし、天國の柱とした。ケバとは岩石の義である。ゼベダイの二子には雷の子と名づけて其猛烈を賞し、ペテロならざるシモンには正義黨の渾名をさへ與へ、ユダがレツバイは誠實の義を云ふた者で、其人物の誠實なるを推した。斯くて耶蘇は彼等を子と呼んで愛撫したものである。父としての彼は或は怒り、或は笑ひ、或は悲み、或は泣き、熱誠を傾けて彼等が靈性を導いたものである。

大なる教育家はまた大演説家である。彼はカペナウンを引上げ

て四方に漂泊せざる可らざる境遇となつた。蓋しエルサレムの學者を初めパリサイの徒は、アンテバスと相結むで彼を害せんと謀つた爲である。彼は夜密かに船に上り、湖に浮かんでピリビの彼方に落ちのびた。狐には穴あり、空の鳥には巢あり、ひとり豫言者は枕するところがなかつた。遇々一青年の如きは奮つて其弟子たらんことを申込むだが、鳥や狐を羨むの不遇に甘んぜねばならぬと聞かざるゝや、悄然として逃げ去つた。耶蘇が如何に窮狀を呈して居つたか、其光景が思はるゝのである。敵の追究も、稍々緩かとなつて、耶蘇は再びカペナウンに歸つた。異邦に流寓して幾多の辛酸を嘗めたる彼は心に決するところある者の如く、カペナウンを距ること一里、地はなだらかに草は萌へ、自然の座を設けられたる一小丘を卜して、從來道を聽いた子弟を始め、

多くの人々を集めて大演説を試みた、半歳に亘るの雨期まさに去つて萬物蘇生、百花風に舞ひ、禽鳥樂を奏するの時であつた、心の清きはヘルモンの雪峰、心の貧しきはタボルの山骨、自然に於てはそのまゝなるも人に於ては容易ならざる業なるべし、いかに思煩へばとて寸陰もその生命を延べ能はざる人の果なきよ、肉より云へば空の鳥にすら如かざるべし、ソロモンの榮華の極の時だにも其装ひ野の百合花に及ばざりき、されど靈に於ては天の父の完全さが如く完全かるべきは人にあらずや、されば一日にて足る一日の苦勞は、須らく神の國と其の義とを求めよ、朝に道を聽かば夕に死すとも可なりとせざらんや、微風百合花を撫して香いよ、深く偉人衆生を思ふて情愈々濃かなり、さるにてもまた偉人の胸裏には、變り易かる秋天の至るを思ひ、霜

を含める秋風の近きを考ふるものゝ如しであつた、やがて小高き場所に座を占めて、徐ろに口を啓き、權威あるものゝ如く教を垂れた、我なんちらに告げん、生命の爲に何を食ひ、何を飲み、また身體の爲に何を衣んと憂慮と勿れ、生命は糧より優り、身體は衣よりも優れたる者ならず乎、天空の鳥を見よ、稼くことなく、穡を爲す、倉に蓄ふることなし、然るに爾曹の天の父は之を養ひ給へり、爾曹之よりも大に勝るゝ者ならずや、爾曹のうち誰か能くおもひ煩ひて其生命を寸陰も延得んや、また何故に衣のを思ひわづらうや、野の百合花は如何にして長かを思へ、勞ず紡がざる也、われ爾曹に告ん、ソロモンの榮華の極の時だにも、其装この花の一に及ざりき、神は今日野に在て明日爐に投入らるゝ草をも如此よ、そはせ給へば、況て爾曹をや、嗚呼信仰うすき者よ、然ば何

を食ひ、何を飲み、なにを衣んとて思わづらう勿れ、此みな異邦人の求る者なり、爾曹の天の父は、凡て此等のものは皆なんぢらに加らるべし、是故に明日の事を憂慮なかれ、明日は明日の事を思わづらへ、一日の苦勞は一日にて足れりとあるのを見ると、辛酸を嘗め來つた彼の人生觀に於ける思想の秘幽が伺はるゝのである、彼は演説を終へて直に十二人の弟子を選定した、この小丘こそ祝福の山と稱せられて、世にも有名なものとなつた、

斯くて耶蘇は十二の弟子を設けてから、二人つゝ一隊となし、ガリラヤ全州に派遣して天國の宣傳をした、偶々テベリヤに來りしヘロデ王は天國の聲を聽いた、バブテズマのヨハネが思ひ合はされて、一度び血に染めたる彼が手は再び新豫言者耶蘇の上に染めんとした、ヘロデ汝を殺さむとす、速かに落延びよと告げ

たるパリサイ人に對して、豫言者たる者はエルサレムの外にては決して殺さる可きものでないと答へて、耶蘇は湖水を渡りてピリビの領内に避難をした、十二の弟子等も此所に集まつた、彼が再び避難所から出で來るや否や、パリサイの學者等は論争を試みんとて耶蘇の許に押寄せた、蓋し彼等は宗敎法院の命を受けて、僞豫言者の行動を見張る可く申附られたものである、彼等は如何にしてか僞豫言者の罪を擧げて法に處せんと考へた、偶々弟子等が手を洗はずして飲食をしたのを見るや、これ窟強と直に迫つて難詰をした、何故なれば汝の弟子は食事の前に手を洗はざるか、耶蘇曰く、何故なれば汝等は手を洗ふて心を洗はざるか、心の汚れたる者が手ばかりを洗ふたとて何の役にたつものか、汝等は本末を顛倒したものである、神は心の清きを喜び給

ふのである、手を洗はざればとて何も不都合はない、心を洗はぬ汝等こそ不都合千萬である、それ口に入るもの人を汚すにあらざ、口より出づるもの人を汚すなりと、口角泡を飛ばして激論をやつた、初めての衝突ではあり、議論も随分激しかつたので弟子等も大に怖れを抱いたものと見へる、ペテロの家に引上げてから、弟子等はバリサイ人の憤怒に心配をして彼是と老婆心を云ふた、爾來バリサイ人は耶蘇を目して偽豫言者と呼び、耶蘇はバリサイ人を目して偽善者と呼び、肉を喰はずんば已まざるの態度を以て互に相敵視した、

激論後、耶蘇は再びガリラヤを引上げて、北方地中海の濱に彷徨するの止むを得ざるに至つたのである、幾日月の漂流を経て再び湖水に浮んでガリラヤに歸つた、ゲネサレ平原の小邑ダルマ

ヌタに足を止めた、耶蘇は相も變らず天國の近きを宣べ傳へたが、世間の待遇は打て變はつた有様となつた、昨日の春は今日の秋、人は冷笑を以て迎ふるの有様となつた、曾て熱心に道を聽いた連中も一人だに來なくなつた、偶々集まつた人も家業の繁忙を口實にして歸り、親の葬式を口實にしては歸り、財産を擲つて従はざる可らずと聞いては、口實もそこへに逃出した、踏止まる連中は嘲哂せんが爲である、中には眞の豫言者たる證據を示せと迫る彌次馬連さへあつた、先には大教師として崇敬置かざりし人々が、今や冷笑と侮蔑とを以て迎ふるのである、禍なる哉、奸惡なる世なる哉と、幾度もく、耶蘇が口に繰返へされた、秋、天の變り易きを思ひ、秋風の霜を含むを考へたる彼も、現に其境に投じては、宗教觀の太陽も自ら斑々たる黒點を宿すに至つた、來

れ、汝の罪容るる可し門を叩けよ、されば開かれんと左右に擧げたる彼が手も、今となりては秋霜に冷へ渡つた、神の審判と、刑罰とを呼號せざるを得ざるに至つた、晩秋の霜愈々深ふして、嚴冬の雪將さに到らんとす、彼が傳道の態度は、こゝに全く一變した、彼が視線は一方にのみ傾射するに至つた、世に最も賤しめらるる、貧民、乞食、足跛、癩病人に注いだ、更に又最も憎まるる、税吏及び最も賤しめらるる、娼婦に注いだ、健康なる者は醫者の必要なし、唯病人のみ醫者の必要がある、我が來るは義人を招くためではない、罪人を招かんためにこそ來たのであると宣言をした、彼が始め十二弟子を四方に派遣して道を宣へ傳ふるや、懇ろに教へて曰く、異邦の途に往なかれ、又サマリア人の邑にも入るなかれ、惟イスラエルの家の迷へる羊に往けと、如何に彼がアブラ

ハムの子孫を思ひ、モーゼの遺謨を奉せしかを見よ、又如何に古來の豫言者の口吻に相似たるかを見よ、バプテズマのヨハネもこの主義であつたが、耶蘇の身の今となりては事態顛倒、異邦人は却て其味方となつた、サマリア人は却て其教を受くるものとなつた、豫言者故郷に尊ばれずが愈々擴張された譯である、斯くて彼は異邦人と相近づくに従つて、イスラエルの迷へる羊とは愈々相遠ざかつた、バプテズマのヨハネは死後に至るまで、迷へる羊の友として猶太人に迎へられたが、耶蘇基督に至つては生前既に其敵となつた、其拒まるる所となつたのである、等しく天國を宣へ傳ふるの大教師なるに、一は迎へられて友となり、一は拒まれて敵となつた、ヨハネは是にして耶蘇は非なるか、耶蘇是にしてヨハネ非なるか、夫れ耶蘇とヨハネとは天に屬するの人の

である。猶太人は地に屬したものである。迎へらるゝと拒まるゝ
 と。天に屬する人の敢て關するところでない。迎ふると拒むとは
 地に屬する者の須らく關せざる可らざる一大事縁である。果し
 て然らば迎へられたるヨハネも天である。拒まれたる耶蘇も天
 である。之を迎へたるは地に屬する者の事縁を完ふしたるもの
 である。之を拒みたるは地に屬するものゝ事縁を空ふしたるもの
 のである。事縁を完ふしたる世は幸福なる世である。が事縁を空
 ふしたる世は禍なる世である。幸福なる世と禍なる世と。世は同
 じき世であつた。若しヨハネが出現のみに止まらしめば世は幸
 福なる世であつた。が耶蘇一たび現はれて幸福なる世は忽ちに
 して禍なる世となつた。蓋し人心深く潛みたる奸悪が一朝偉人
 の利劍に觸れて忽ち發かれたものである。人心の奸悪が發かれ

たのは取も直さず審判が行はれたものである。耶蘇を拒みたる
 猶太人こそは自己の奸悪を白狀して自ら審判を受けたるもの
 である。然らば則ち迎へられたると拒まれたるとは方に以て人
 格の大小を見るべきである。利劍を掲げて奸悪を發き、猶太人を
 して自ら審判を受けしむるに至つたる耶蘇の人格の偉大に比
 して、ヨハネが人格の如何に小なるかを見るべきである。

第九章 基督觀 (八)

あゝ神よ、しかの溪水をしたひ喘ぐが如く、わが靈魂もなんちを
 したひあへくなり、然ばわれヨルダンの地より、ヘルモンより、ミ
 サルの山より汝をおもひいづ、なんちの大瀑のひゞきによりて
 淵々よびこたへ、なんちの波、なんちの猛浪ことくくわが上を

こえゆけり、然はあれど晝はエホバの憐憫をほどこしたまふ、夜はその歌われと共にあり、此うたはわがいのちの神にさぐる祈なりと、古人の謳ひけん溪流はヨルダンの源泉にして、カイザリヤビリピの通路である、苦致幽邃、夏猶寒し、バレストイン第一の勝地と知らる、仰げば高く聳ゆるレバノンの塔はいつもながらの姿なれど、今日のみは嚴めしくも傲然たるさま、アンテバスとも見へ、風致の骨髓たる断崖絶壁も殊の外なる怒りを含み、迫りに迫りて、峡谷を壓するところ、パリサイの學者とも見ゆ、絶壁の下、深大なる洞穴あり、暗濛濛殺幽氣人を射て、さながら死の門を覗ふが如し、深く入つて之を探れば、淵然たる湖水を湛ふ、寂としてその底を知らざるもの、死の謎秘の知る可からざるにも似たるかな、峡谷を出て、丘陵に上れば、心氣濶然、眼界忽ち天上に

連る、皚々たるヘルモンの山は白衣を被りて、ヨハネの來るが如く、峨々たるレバノンの山は紫衣を着けて、モーゼが往くにも似たり、レバノンの塔は低くせられ、小さくせられて朽つるの時あるを告げ、断崖絶壁もやがては埋められ、夷げられ、天上に昇る靴の踏臺とならん、若しそれ死の門は復活の門なるべし、その謎秘を解くこと靴の紐を解くよりも易かるべし、かくてモーゼ野に蛇を舉げし如く、人の子も舉げらるべし、ヨハネ河にバプテズマを施し、如く人の子もバプテズマを施されん、

耶蘇基督は此地に靜養すべく、カイザリヤビリピに來た、ベツサイダを距ること十四五里である、頃は臘冬、踰越節の前であつた、天下の暗雲迫るを見たる彼は、深く自ら決するところあつて退いたものである、されば彼は出拔けにも弟子等に問ふた、世人は

我を目して誰とするかと、弟子等は見聞のまゝ、エリヤであるとか、エレミヤであるとか、或はバブテズマのヨハネが甦つたものであるとが、批評は色々聞及んだが、汝を以てメシヤとするものは天下一人もない、病人や、乞食の仲間では汝を以てメシヤであると思つて居る輩もあるやうだが、メシヤの名を以て汝に與ふることは以ての外として、之を厭ひ、之を忌み、之を憎むのであると答をした、耶蘇は鬚髯を撫しながら、然らば汝等は我を以て誰と思ふかと切り込んだ、例のペテロは人の言葉を奪ふが如く、汝はキリストなる可しと即答した、耶蘇は一人の高弟の即答を聞いて大に満足をした、天下は我が自覺を認めずして却つて狂と呼び、我を遇するに僞豫言者を以てするにも關はず、弟子等は我が自覺に冥感するところ有りてキリストなることを直覺

した、教導化育の功空しからずと、彼が心は躍つたのである、ヨナの子シモンよ、汝は幸福である、我をキリストと見たのは汝が身體や血液の力ではない、天に在す神なる父の示し給ふたものである、汝こそは岩である、將來我教會の建らるべき礎はこの岩であらうと、耶蘇は感極つて嘆賞した、僅にペテロ一人の口より出でたる言葉ではあるが、信仰としては無限の力である、一個の燭臺に火が點じたならば、他の多くの燭臺に火を移す事は譯もないことである、弟子等にして既に信仰が出来たならば、是を天下に及ぼすことは敢て困難の業ではない、一人の信仰は即ち天下の信仰である、一人に成就されたのは即ち天下に成就されたのである、耶蘇が満足したのも最なる譯であらう、アラビヤの豫言者マホメットが、ヘウの洞窟にありて一度び豫言者の自覺を得

るや、直ちに家に歸つて其妻カヂエに告げた、マホメツトは何處までもアラビヤ的である、卒直である、妻は問答をも試みず即刻之を信仰した、マホメツトが満足も思ひやらるゝのである、月島崖上に徹底したメシヤブダも、直様、舍弟武市に超絶の自覺を告げた、彼は直ちに信ずるのみか、自ら身命を抛つて道を傳へん事を誓つたのである、時に明治三十六年九月であつた、其十一月、彼は濫焉として逝いた、彼が心靈は豫言者の衷に永遠である、我妻光子に至つては豫言者を信ずるの信仰のために、身を以て配した次第である、耶蘇のそれよりも、マホメツトのそれにも優りて神秘妙契のことではあるまいか、

如斯く弟子等は耶蘇を以て來る可きクリストとは信じたが、其クリストが如何に天職を行ふ可きかに就ては、耶蘇自身に於け

る自覺のクリストとは甚だしき相異がある、耶蘇はこの點を深く弟子等に得心せしめざる可らざる必要がある、されば耶蘇は愈々自覺のクリストの通る可き道行きを説きはじめた、古來聖經に示されたるが如く、クリストたる者は學者と、祭司と、多の民とに虐けられ、口にて罵られ、石にて撃たれ、遂に十字架に針けらる可きこと、死して三日の後には再び榮光の雲に駕して來り、以て天國を地上に建設す可きこと、を告げた、弟子等は驚かさざるを得ない、クリストが昨今にも天國を建設するかと思ひきや、十字架の上に最後を遂げんとは案外千萬である、今にして死なれては以ての外の不覺である、天國の宣傳も言語同斷の敗亡である、一同仰天して言葉も無かつた、さすが騒急のペテロすら無言であつた、漸くにして口を開き、主よ宜しからず、この事はか

りはやめて候べし、十字架のみは見合せ候へと諫言を呈した、熱血を濺いでクリストの根本的精神を發表したる耶蘇は、十字架を見合せると聞いては憤らざるを得ない、言ひ甲斐なき弟子どもかなと、勵聲一番サタンよ退けと奴鳴つけた、ペテロは人間のことを思ふて神のことを思はぬ惡魔だと叫んだのである、耶蘇はかくペテロを叱りは叱つたものゝ、十字架に對しては彼自身にも少からず煩悶があつたのである、われに受くべきのバブテズマあり、その成し遂げられんまでは吾が痛み如何ばかりぞやは、彼が煩悶の程を察す可きである、義なるアヘルも血を流した、バラキアの子ザカリヤも血を流した、バブテズマのヨハネも血を流した、古來の豫言者の歴史は凡て血を以て書かれてある、況んやクリストたる身が十字架にかゝるべきは必至の要件であ

る取も直さずクリストのクリストたる以所である、十字架の血はクリストたるの要件であるとは彼が始めからの覺悟であつたが、時節既に到來して天國の將來を思ひやれば、殆んど失望せざるを得ぬのである、世を擧げて我に反き、我が道を聽かんものとて一人だもあらはこそ、十餘の弟子ありと雖ともクリストの真相を解する者一人だになし、このまゝ直ちに天國を得んとの誤解は、彼等をして愈々この世のことを思はしめ、人間のことを思はしむるのみである、かゝる淺薄なる解からぬ頭では、信念も從つて薄弱なるは勿論である、薄弱なる信念の彼等にして、たゞ十字架の血を目撃せんか、我を棄て、逃げ去るは明かである、身は十字架の最後を遂げ、弟子等は四方に散つて歸らず、メシヤの自覺も亡ぶるではあるまいか、天國も空しく煙と消ゆるでは

あるまいか、嗚呼如何せん、思ふて茲に至れば我が胸裂けんばかりに痛みあり、噫如何せん、

されど翻つてこれを思へば一道の血路なきに非ず、バプテスマのヨハネ斃ると雖も弟子等は今猶其遺業を繼いで天國同盟の擴張に力を致して居るではないか、道を後世に傳へんには須らく弟子に傳ふるに如くはなしである、我が弟子果して道を傳ふるに堪ゆ可きであるか、淺薄なる頭と、薄弱なる信仰の彼等、之を思へば傳道も覺束ない譯である、されどヨハネが弟子も人である、我弟子とても人である、ヨハネの弟子にしてやれるならば、我弟子とてもやれない筈はないのである、相違の點は信仰の強弱のみである、ヨハネの弟子は現にやつて居るではないか、されば我が弟子とてもやれる筈である、またやらさなければならぬ譯

である、焦眉の急場彼等を其まゝ活かすの外はない、彼等を活かさんには猛烈なる靖獻の火を浴びせるのみであると、劍戟を提げ、血を踏んでローマに抗じたる英傑ユダが其子弟を勵ましたる格言を捕へ來つて弟子等に抛つた、その生命を得る者は之を失ひ、我ために生命を失ふ者は之を得べしと、さらに語を次ひて十字架を任ふて我に従はざる者は我に協はざる者なりと宣言をした、

勇猛なるペテロと雖も、未だ確固不拔の信仰でない、況んや其の他の弟子等に於ては薄信申す迄もないことである、彼等を頼みとして安心することは一刻も出来ない、出來得る限り力の有らん限り、クリストはクリストとして自ら證明をしなければならぬ、自覺を實現して自ら示さなければならぬ、如何に實現す可き

であるか、クリスト的實現とは如何にす可きであらうか、彼が腦中にはエルサレムの神殿が浮かんた、クリストとは活けるエルサレムの神殿である、死せるエルサレムの神殿を淨めて活けるエルサレムの神殿となさねばならぬ、今や輸越節は目前である、此の機に乗じてエルサレムに上り、百萬の群衆に對して、クリストの大宣言をすべきである、宣言と共にクリストの自覺を實現すべきである、かくて以てイスラエルに眞生命を與へんと覺悟をした、こゝに於て彼は私かに叫んだ、我が来るは地に泰平を出さんと、非ず、刃を出ださんが爲に來れるなりと、

耶蘇は如斯き大決心を以て覺悟を極めたが、又一方には不安の念が横ふるるのである、ヨハ子の死後、天國同盟の猶傳へられて今日に至ることの出來るのは、彼が死すると生くるとに關せざる

ものである、猶太人は始めから之を迎へて其道を聞いたものである、彼が訃音の傳はるや、人々は涙を垂れて之を弔したものである、猶太人に於ける我はヨハ子と全く其趣を異にするものがある、彼は迎へられたが、我は拒まれたのである、彼は順境であるが、我は逆境である、順境にありて迎へらるゝ者の道を傳ふるのは容易の業である、逆境にありて拒まるゝ者の道を傳ふるのは頗る困難の業である、彼が横死は世の同情を得て道を傳ふるためには却て力となつたが、我が十字架は僞豫言者の刑罰である、世の同情もあつたものではない、之に加ふるにヨハ子の弟子と、我が弟子との信仰の強弱は甚だ相違するものがある、ヨハ子に對しては來る可きエリヤとして、の信仰である、舊約書を其儘に讀んで何の差支もないのである、六ヶ敷宗教意識に於ける鍛練

の必要もない。我に對しては來る可きクリストである。現代の思想を遙に超越したるクリストである。之が真相を了得せんには、最も崇高なる宗教意識を要するものである。ヨハ子の弟子たるは易く、我が弟子たるは難いのである。信仰の強弱はこゝから來たものである。さらに深く之を思へば、日夜相伴ふの弟子にすら了得し難きクリストの真相が、超越節數日間の行動を以て、果して猶太人に了得せしむることが出來るであらうか。頗る覺束ない譯である。何れにしても我が十字架は時機猶早い次第である。出來るものなら自覺の真相を多少なりとも世に明かにした上で、十字架に掛りたいものである。せめては弟子等にだけでも了得せしめて斃れたいものである。我に與へられたる盃は飲まねばならぬであらうか。天の父は猶豫を與へ給はぬであらうか。噫

々斷腸の思ひである。されどパンを求むるに石を與へざる天の父は、クリストなる我によからぬ盃を與へ給はんや。父の聖旨に従ひ奉らんかな。苦き盃も飲む可し、十字架にも上る可しと、心機はこゝに一轉した。天命に任せたのである。茲に於てか信念は舊約書中に復活した。多くの豫言者が豫言したる豫言に歸つた。舊約書中のダニエル書及びエノク書を見ると末日審判の有様が委しく書き記されてある。神の子榮光の雲に駕して降り來り、大審判を行ふて茲に天國を建設するのであると書いてある。耶蘇はかねて是等の書を讀んで胸に收めて居つたが、今は電光となつて輝き渡つた。雷霆となつて轟き渡つた。私かに謂らく、世の審判を行ひ、天國を齎らすのクリストはエホバより來るべきである。エホバと一なるものである。父と我とは一なりとは我が自

覺である。父と一なる我こそは。クリストの自覺である。クリスト
 なる我は天國を建設すべく任命がある。天國を建設するのクリ
 ストはまさに審判の大權をも有す可きである。然るにクリストの自
 覺たる我は、今直ちに世を審判することが出来らうか。神
 の大權なくんば能はずである。神の大權は如何にして得らる。
 であらうか。神の大權を得んには、須らくバプテスマを受けねば
 ならぬ。血のバプテスマである。十字架のバプテスマである。十字
 架に掛けられて死し、死の門を通りて神の右に座し、以て大權を
 得るのである。かくて大權を提げて、榮光の雲に駕し、再び地に降
 り來りて審判を行ふのである。審判を行ふのは、取も直さず天國
 を來らす以所である。

果して然らば悲惨なる我が十字架は、まさに榮光の大權を得る
 の鍵である。死の門は復活の門である。去るの時は來るの時であ
 る。古來の豫言は擧げて我が一身に成就さる。次第である。我は
 復活す可く死するのである。我は審判す可く殺さるのである。
 されば我が盃は祝福の盃である。我がバプテスマは榮光のバプ
 テスマである。さればこそ天の父は我に盃を與へ給ふのであつ
 た。大權を與へんがために、榮光に座せしめんがために、十字架の
 バプテスマを授け給ふのであつた。ヘテロを始め薄信なる弟子
 等の一夜の眠り醒めざる内に、我は再び降り來らんと彼は、大悟
 徹底をした。この徹底は勿論舊約書から出た信仰ではあるが、そ
 もく亦七たび人間に生れての精神である。苟も大任を帯びて
 世に立ち、偉業半ばにして斃るゝの人、誰か七たび人間に生まる

るの精神なからんや此の精神の根柢こそは永生の信念である、永生の信念は復活の精神である、復活の精神は再來の精神である、再來の精神は七たび生るゝの精神である、されば復活、再來は人間自然の至情である、事業は長く生存は短し、永生を思ふはまことに人生抑ゆべからざるの至情である、そもく七たび人間に生るゝも七たび天國に生るゝも、永生の信念に於ては同一である、七たび天國に生るゝはかの世を憧憬するのである、七たび人間に生るゝはこの世を憧憬するのである、彼の世を憧憬するは天國に入らんが爲である、此の世を憧憬するは天國を來さんが爲である、かの世の憧憬と、この世の憧憬とは等しく天國の憧憬である、天國の憧憬は人心自然の憧憬である、かの世とこの世と、天國と、人生との同化を理想したものが猶太人の天國降臨で

ある天には榮光あれ、地には平和あれとは天國の降臨を理想したものである、斯くの如くにしてこの世を天國とするのが猶太人の理想であつた、この理想を實現せんと試みたのが耶蘇基督であつた、かくて彼が再來は實は復活である、彼が復活は實は永生である、永生の信念は人類通有の信念である、彼はこの信念の立脚地に立つて天國を齎らさんとした、されば彼が復活を信じ、再來を信じたのも、永生を思ふ抑ゆべからざる人心自然の信念から來つたものである、さらぬだに偉業未だ成らずして先づ斃るゝ彼として、自然の至情ではあるまいか、更らに最後の悲惨なる十字架の彼として、また己みかたき必然の到着ではあるまいか、

彼は如斯くに十字架を解釋した、十字架の門を通つた死後の彼

は復活しては神の右に坐し、大權を得ては榮光の雲に駕し、末日の審判と、天國の建設との任命を提げて再び此の土に来る可く解釋した、されば彼がためには榮光の門たる十字架を叩かんに、は、須らく生前の活動を要するのである、いでや、踰越節の機に乗じてエルサレムに上らんかな、彼は偽善なる學者を思ひ、禍なる世の中を思ひ、迷へる小羊を思ふと共に、大權を思ひ、榮光を思ひ、審判を思ひ、天國を思ふて胸に萬感を横へ、エルサレムに上る可く心が急がれた、

第拾章 基督觀(九)

長閑なる春の日も山野の暮色ばかりは物淋し、旅人の情はさらなるに、世にも心痛む人の萬目をや、日は落ちて、望み蒼然、風は冷

かに思ひ寂寞たり、ヨルダンの濁水、ユダの荒野、自然は昔ながらの自然なれど、洗禮の手、天國の口の主人公は今は昔の人となり、にき會てヨルダンに水のバプテズマを浴びける身は、今や血のバプテズマに浴びんとて死海にそぐ河を渡りぬ、尊ばれざるは故郷のみと思ひきや、世を擧げて我に反かんとは、ヨハネのバプテズマだに天より出でしとするにあらずや、休徴を見ざるが故に地より出でしとて、我がメシヤを拒む世の奸悪さよ、されど王匠の棄てたる石はかへつて家の隅の首石とならん、それを怪しとする人の世は人にまかせぬべし、ヨルダンの濁水、ユダの荒野、無言の自然は言ふにまさりて情いよく、切に哀悼極つて不動の野もために動き、奔流の水もために停つて十字架の行を送り、シオンの峰、カンランの山、無罪の自然は宛がら復活の刹那を描

き。暮。靄。ほ。の。か。に。寂。美。を。も。た。ら。し。つ。榮。光。の。帷。に。迎。ふ。な。る。さ。ば。れ。
 モーゼはネボ一の嶺にそゞる昔を語り、ヨハネはアタラスの
 峰に繰返されたる今を語りひける、さても禍なる世と人の奸惡
 は、ノアをも通ひきアダム以來の汚血なるかな、山と河と野と海
 とは其まゝにてありなん、されど人の世はやがては亡び、一の石
 も圯されずしては遺らざるべし、そは神の國の來らんだめなる
 べければなりと、低回願望、崇嚴の氣が虹の如くに横ふるを耶蘇
 は感じた、弟子等は師が眉目の凄蒼たるを見て、驚き且つ怖れた
 のである、

この晩はエリコに宿泊したが、エルサレムに上らんとてカイザ
 リヤピリビを發足したる彼等の一行は、落人の如くに異邦人の
 土地を通り、人跡稀なる原野を横ぎつて人目を避けたものであ

る、夜に入りてカペナウンに達し、ペテロの家に宿泊した、耶蘇は
 死に臨むの生別であるから、これまで交はつた故舊の人々とは
 よそながらの暇乞である、彼は近來著るしく沈痛となつたが、こ
 の晩は一層沈痛であつた、母の乳房にすがる赤兒を手ら抱きか
 かへて弟子等に向ひ、汝等もこの赤兒の如くならざれば天國に
 入ることは出来ない、天國の人は皆赤兒の如きものである、人の
 頭となるものは人を役ふものではない、人に役はるゝ者が人の
 頭となるのである、我が來たのも人を役はんがために來たので
 はない、人に役はれんが爲に來たのである、多くの人に役はれ、多
 くの人のために生命を捨んが爲に來たのである、汝等も人に役
 はれなければならぬ、汝等もし人の頭とならんと思ふならば、人
 に役はるゝものとならねばならぬと言ひ聞かせた、弟子等が途

中でわれが頭だ、己れが頭であると互に争つたのを戒めたのである、この晩はいつもよりも殊によるこぼしい集合であつたが、笑ひ興ずるがなかにも何となく一種沈鬱の氣が横はつて居つた、ガリラヤの豫言者耶蘇は最も縁故あるカヘナウンに暇をつげ、最も愛したるガリラヤ湖に浮んでヨルダンの對岸に途をとつた、ギレアテ連山の下、ヨルダン河に添うて進むだ、ヤボクの河を渡り、死海に近き邊からヨルダン河を渡つてユダの荒野に出て、荒野を横ぎりてエリコに達した、

エリコの人々はガリラヤの豫言者を大に歓迎した、踰越節の参拜者の多くも隊を作りて其後へに従ふた、歓迎の群衆は随分多かつたと見へて、サーカイと云ふ小兵の男は耶蘇を見んとて桑樹に登つたといふことである、耶蘇は是等の群衆を率いてエル

サレムに向ふた、ベツパゲに至るや直に弟子に命じて、知人の家から驢馬の子を借り來らしめて之に乗つた、蓋し舊約のザカリヤ書中に、シオンの女よ大に喜べ、エルサレムの女よ呼ばはれ、視よ汝の王は來る、彼は正義して拯救を賜はり、柔和にして驢馬に乗る、即ち牝驢馬の子なる駒に乗るなりとあるに擬したものである、驢馬に跨りて揚々として來るを見たる群衆は、俄かに騒ぎたち、ベタニヤからの歡迎者と相混じて歡呼雷の如く、衣服、或は樹枝を地に布き、花を投じ、葉を投じ、ホザナよくとの讚美を稱へ、盛なること凱旋の有様であつた、ガリラヤ的熱烈の弟子等は狂せんばかりに悦んだが、死の一念に蓋はれたる豫言者は愈々眉目凄蒼であつた、彼がザカリヤの豫言に擬してエルサレムに乗込だのは、豫言そのまゝに拘泥せざる彼といでは珍らしい、振

舞である、精神を汲むに熱中して自然形式を追ふのは人情の常である、バブテズマのヨハ子の如きは最も甚敷ものがあつた、イザヤの野に叫ぶ人の聲ありを直ちに實行してユダの荒野に叫んだ水を以て洗ひ水を以て淨むるの豫言を其まゝ實行してヨルダンの洗禮を試みた中には笑ふべきものがあるにしても、兎に角有ゆる豫言が實現されて生命を産むのは斯る熱中があるからである、如何にも神秘冥合の消息と云ふべきである、かくてエルサレムに着した、耶蘇は驢馬を降りて神殿に入った、堅く閉ぢられたる口は怒を含み、眼は憂愁を以て光あり、凄蒼たる顔面は愈々凄蒼であつた、兩手を背負ひ、足に任せて神殿の外を逍遙した、風雨將さに至らんとして、天地靜かなるの觀である、この夜はベタニヤに退いて癩病人シモンの家に宿泊した、翌

日彼は再び神殿に入った、殿中に店を張つて商賣をするものがある、賽錢の兩替や、供物の鳩等を賣るものが有つて喧轟を極めて居る、之に觸たる耶蘇が眉目は凄絶の極度に達した、骨忽ち鳴り、肉忽ち躍つた、足を舉げて店案を蹴倒し、繩の鞭を振り舞はして、彼等をたゞさ出した、我家は祈りの家と稱へらるべしとあるに、汝等は盜賊の巢となした、盜賊共よ、虻の裔よと怒鳴り渡つた、十字架を決したる彼は瘡痕を負ふたる獅子の如しである、蓋し彼は神殿を革清するの精神である、神殿の革清こそはクリスト的實現である、クリスト實現の活動である、彼は之が爲にエルサレムに上つた、今や彼が精神は高潮したのである、クリストの自覺は實現されたのである、磅礴たる大精神は神殿のゆるぐを覺へた、咆哮、跳躍、風雨雷霆を飛ばすの勢であつた、

翌朝更らに神殿を徘徊した、参拜の群衆は耶蘇を見るやホザナ
よく、ダビデの子よと歡呼して騒ぎ出した、口は閉ぢ、眼は光り、
緘黙を守る彼はカンラン山を望むて深き感慨に沈んだ、我が
乗るべき驢馬について豫言をしたるザカリヤが屍は、山腹のか
なたに葬られてある、彼はこの神殿に於て演説中、石を以て殺さ
れたのである、彼斃れて五百年、我また血の跡を踏まんとするの
である、豫言者ザカリヤの血は神殿の浄めの血であつたのであ
ると、追懐淋漓漸くにして彼は口を啓ひた、一の譬を聞け、或家の
主人葡萄園を樹り籬を環らし其中に酒樽をほり、塔をたて、農夫
に貸して他の國へ往きしが、果期ちかつきければ其果を收めん
ために、僕を農夫のもとに遣はせり、農夫どもその僕等を執へ、一
人を鞭ち、一人を殺し、一人を石にて撃てり、また他の僕を前より

も多く遣はしけるに、これにも前の如くなせり、我子は敬ふなら
んと謂ひて、終に其子を遣はし、に、農夫等其子を見て互に曰け
るは、こは嗣子なり、いで之を殺して其産業をも奪ふべしと、即ち
之を執へ、葡萄園より逐出して殺せり、されば葡萄園の主人きた
らん時に、この農夫に何を爲すべきか、聖書に工匠の棄てたる石
は家の隅の首石となれり、是主の行給へることにして、我儕の目
には奇しとするところなりと録されしを未だ讀まざるか、是故
に我なんぢらに告げん、神の國を爾曹より奪ひ、その果を結ぶ民
に予へらるべし、この石の上に墜るものは壞れ、この石の上に墜
れば其もの碎かるべしと、イザヤの豫言を引用して心ひそかに
ザカリヤを弔しつゝ、怒號一番、パリサイの學者と祭司等を一喝
した、この面譴をあびたる彼等は憤らざるを得ない、機に乗じて

耶蘇を罪に服せしめんと決議をした、何なりと彼が言失を捕へて罪せんものと、彼等は様々なる質問を持ちかけた、耶蘇が答辯の輕妙なる、快刀亂麻を斷つが如しであつた、或は反問し、或は難詰して反つて彼等をして閉口せしめたのである、論争愈々激して感情は愈々衝突した、感情愈々衝突して危機は刻一刻に迫まつて來た、

輸越節の終りの三日前に、彼はまた神殿に現はれて雄渾熱烈なる最後の大演説を試みた、噫なんちら禍なるかな偽善なる學者とパリサイの人よ、爾曹は白く塗りたる墓に似たり、外は美しく見ゆれども内は骸骨と、様々の汚穢にて充、此如く爾曹もまた外は義く人に見れども、内は偽善と、不法にて充、噫なんちら禍なるかな偽善なる學者とパリサイの人よ、爾曹豫言者の墓をたて、義

人の碑を飾れり、又いふ我儕もし先祖の時にあらば、豫言者の血を流すことに與せざりしをと、然ば爾曹は豫言者を殺し者の裔なることを自ら證す、なんちら先祖の量を充せ、蛇虺の類よ、爾曹いかで地獄の刑罰を免れんや、是故に我爾曹に豫言者と、智者と、學者を遺さんに、或は之を殺し、又十字架に釘け、或は其會堂にて之を鞭ち、或は邑より邑へ逐苦めん、そは義なるアヘルの血より殿と、祭の壇の間にて爾曹が殺し、バラキアの子ザカリアの血に至るまで、地に流したる義人の血は凡て爾曹に報來らんが爲なり、われ誠に爾曹に告ん、此事みな此代に報來るべし、噫エルサレムよ、エルサレムよ、豫言者を殺し、爾に遣さるゝ者を石にて撃もよ、母鶏の雛を翼の下に集むる如く、我なんちの赤子を集んとせしこと幾次ぞや、然ど爾曹は好ざりき、視よ、爾曹の家は荒地と、

なりて遺れん、われ爾曹に告ん、主の名に託て來る者は福なりと
 爾曹の云んとき至るまでは、今より我を見ざるべしと、生前再び
 言はじと決心したる彼は、暮色蒼然たる頃、弟子等を率ひてカン
 ラン山に登つた、苔むすザカリヤの墓石を撫しては、泣然之を弔
 し、眼下に搆ふエルサレムを見下しては、悵然之を久ふすであつ
 た、噫、エルサレムよ、ザカリヤのために、墓石を建てたるが如く、我が
 ために、墓石を建るの時來らざる前に、刑罰は汝に來る可し、創世
 以來、建てらるべき天國は將に來らんとす、我が眞の墓石こそは
 來らんとする天國である、アブラハムの在らざりし先より在り
 し、我こそは、天國を齎らし來つて此の土に建設するのである、其
 時、惡魔の血を混じたるアダムの子孫は滅され、猛火の中に投ぜ
 らるゝのである、殺しては殺し、血を流しては血を流し、血に渴く

ことエデンの蛇にも似たるエルサレムは禍なる哉、縁なき衆生
 は、度し難し、母鶏の翼を嚙破つたる狼は禍なるかな、噫、エルサレ
 ムよ、やがて榮光の雲に駕し來るの時、汝は悲み切齒するであら
 う、思ふてここに至れば、我心痛みて裂けんばかりである、と長大
 息をした、十字架の後、幾程もなくエルサレムは滅亡をした、
 祭司及び學者等は理も非も考ふるの餘地がなくなつた、如何に
 もして耶蘇を捕へ、十字架の極刑に處せんと決議をした、機會は
 意外の邊から提出せられた、耶蘇が十二の弟子の一人なるイス
 カリオテのユダは、形勢の非なるを見て失望したか、謀反して其
 師を賣らんと企てた、祭司と學者とはユダを用ゐて耶蘇を捕へ
 んと手筈を凝らした、
 ニサンの十四日には祭の式を奉じて、弟子等と共に輪越の食事

をした、イスラエルの祖先がエジプトに於て苦められたる紀念式を奉じたのである、踰越の食卓にはパンと小羊とが備へられたるものである、パンは苦難のパン、小羊は踰越の肉體と名づけられたるものである、式まさに終らんとするとき、耶蘇は踰越の式に因みてパンの一片を取り、謝して之を裂き、弟子等に與へて曰く、此は汝等の爲に與ふる我身體なり、我を記ん爲に此を行せ、また食して後、盃を取り曰けるは、此盃は爾曹の爲に流す我血にして、立つる所の新約なりと、かくて式を終へ、大ハレルヤを歌ひつゝ、弟子等と共にカンラン山に押寄せた、月は明かに思ひは曇るのである、風は冷かに心は燃ゆるのである、天は破ぶれよ、地は裂けよと、聲を限りに咆哮して、またも大ハレルヤの歌を謳つた、山動き、岩起ち、悲壯凜烈極まつたのである、まさに山を降らんとする時、耶

蘇は弟子に令して武器の用意を命じた、劍を持たぬ者は上衣を賣り拂つて買つて來いと申附けた、二口の劍が既に用意されてあつた、さすがにガリラヤ的血性である、耶蘇は之を見て防禦するには澤山である、この上に必要はないと云つた、この夜は山の麓なるゲセマ子の狭苦しい小屋を宿所とした、殘月白ふして四顧寥々たり、忽ち寂寞を破つたものがある、宗教法院の諜者と、一隊の兵卒であつた、ヘテロは劍を抜き、兵卒の耳に斬りつけた、自若として抵抗もせざる、耶蘇は譯もなく捕はれた、弟子等はこの態に驚いて四方に逃げ散つた、ガリラヤ的血性もあつたものでない、耶蘇は引立られた、途すがら謂らく、弟子は危急の場合に逃げ去つた、數年の教導も徒勞に屬した、事業の後繼者として一人もない、天國の宣傳は大失敗であつた、バプテスマのヨハ子、す

ら後繼者がある、苟もクリストたる我にして何故なれば破滅であらうか、この間忽にして胸中に聲があつた、失敗と破滅とは人の眼である、人の眼なる失敗と破滅とは神の眼には成就である、十字架の門は復活の門である、後繼の必要も更になく、我自ら再び來るのである、右に天國を提げ、左に審判を擡み、頭は大權の冠を戴き、足は榮光の雲を踏んで再び降り來るのである、今の失敗は即ち成就である、今の敗軍は即ち凱旋である、彼は從容として法庭に曳かれた、

法官曰く汝はメシヤなるクリストであるか、耶蘇曰く然り、汝が云ふ如く我はクリストである、我汝等に告ん、遠からず榮光の雲に駕して我が再び來るを見るであらう、法官は啞然として言葉が出なかつた、祭司の長は武者振りついて耶蘇の上衣を引裂き、

此の男は神を汚すことを言つた、別に証言を求むるの必要はないと血眼に叫んだ、かくて耶蘇が罪状はこゝに決した、耶蘇を罪せんとしたのは獨り祭司や學者ばかりでない、人民も同様であつた、神を汚した偽豫言者とは人民の口角にも上つたところである、彼が最後の大演説こそは滿腔の身血を濺いで吐露したものだ、だが聽衆には何の感動も與へなかつた、殆んど風馬牛の有様であつた、反響としては益々祭司及び學者等の憤怒を買ふのみであつた、ホザナよくを叫んだ口は忽にして嘲哂を放つに至つた、偶々バラバと云へる盜賊が捕へられて獄中に在つたが、死刑に處せらるべき筈であつた、このバラバの罪を容るして耶蘇を十字架に釘げよと人民は叫ぶに至つた、昨日まではホザナよ、を稱へて歓迎をした者が、今日となりては十字架に釘けて

殺せと叫ぶに至る、人心の反覆驚く可きではあるまいか、
猶太の法律には、神を汚したるものは城外に曳出して石にて撃
殺すべしとあるから、耶蘇を以て神を汚したるものとして死刑
に處した譯である、祭司及學者等は思ひく／＼に嘲哂と侮辱とを
加へた、或は耶蘇が面に唾して之を打ち、或は耶蘇が目を蓋ふて
其頭を批き、クリストよ、今汝を批いた者は誰であるか、豫言をせ
よといつた者もあつた、次で人々は彼が衣を褫ぎ取つて、絳色の
上衣を被せ、棘にて造りたる冠をかむらせ、右の手に葦を持たせ、
猶太の王様御機嫌よろしうと葦を奪ふて其頭を撲つた、さんざ
んに嘲哂した揚句、ゴルゴダの刑場に引ずつて十字架に釘けた、
其の頭の上に猶太人の王耶蘇なりとの罪標を掲げた、二人の盜
賊が左右の十字架に釘けられ、十字架が三柱あつて耶蘇はその

眞中に釘けられたのである、祭司と學者等は首を揺つて汝は人
を救ふと云ふが、人を救ふ位ならば自分の身を救ふたがよろし
い、人を救ふことを知つて己れを救ふことが出来ないか、もし汝
が眞のクリストであるならば、今十字架の上から下りることが
出来るであらう、或者は汝は常に神の子といつたが、神もし汝の父で
あるならば、この場合必ず汝を救ふ可き筈である、それに何ぞや
天の使すら見へぬでないか、神の子とは一體何を云ふのかと嘲
哂し、十字架に釘けられたる盜賊までもかれこれと耶蘇を罵つ
た、彼は十字架上に於て苦痛に堪へざりけん、我神／＼何ぞ我を
棄て給ふやと絶叫をした、彼がこの絶叫は決して肉體の苦痛を
訴へた譯ではない、精神上の煩悶を叫んだものである、肉體の苦

痛は左右の十字架に釘けられたる盜賊すら忍んだ、されば耶蘇
 とても肉體の苦痛を忍べない筈はない、逃去つた弟子等は今如
 何にして居るであらうか、腐甲斐なき弟子等ではある、されどク
 リストの真相を悟らないためとすれば氣の毒である、また可愛
 想でもある、せめてはも一年も教育したらば覺ることが出来る
 であらうに、此の不殆末に及ぶとは残念至極な譯である、加之な
 らず後繼者たるべきものが臆病にも逃去つた以上は、我が事業
 も是迄である、水泡に屬した譯である、言語同斷の不覺である、
 天國建設の將來を思ふて一時の煩悶を起した次第である、か
 る絶體絶命の煩悶に襲はれては、神に棄てられたる悲運を感ず
 るのも無理ならぬ情であらう、やがて自覺の大信任に立歸つた、
 如何なる運命に遭遇しても、確固不拔なるものは人間の自覺で

ある、メシヤなる彼が自覺は、豫言者の豫言に於ける信念を呼び
 起した、復活再來の信念を呼び起した、さればこそ命まさに終ら
 んとして天を仰いで祝福をした、我が事畢ると、安心立命の最後
 を遂げた、かれが捕はれんとする前夜も、ゲッセマ子の野に於て非
 常なる煩悶をした、終夜神に祈つた譯である、ペテロ及びゼベダ
 イの二子、ヤコブとヨハ子を左右に坐せしめて、痛絶哀絶の情を
 催ふしながら、我が心いたく憂へて死ぬるばかりである、と血の
 汗を流した、弟子等の行末を思ひ、事業の將來を思ふて憂へたも
 のである、弟子等に對する生別の情と、事業に對する死別の情と、
 は斯く有る可き筈である、彼は一々手づから弟子等の足を洗つ
 て之を撫し、且つ、勞つた、かくて天の父に祈をした、父よ、もし協ふ
 ならば、此の苦き盃を我手より取去り給へと、この祈の煩悶をば

再び彼は十字架の上に繰返した譯である。此盃を我が手より取り給へと煩悶の極を祈つたが塞がれば通じ祈れば通ずる譯で自覺の大信任より來たる復活再來の信仰に立歸つたかくて最後の立命に到着した神よ我が心の自由をなさむとするのではない。全く聖旨に任せ奉ると運命に一任をした彼が十字架の最後は即ちこの自覺の大信任より來たる立命であつた彼は是れあるがために瞑目することが出來たのである。

斯る崇高なる自覺を得たる耶蘇にして然も幾度か決心の臍を固めたる彼にして煩悶を繰返して煩悶をするのは彼が宗教的信仰の上に大なる欠陥があるからである。煩悶をするのはよろしいが同じ煩悶を幾度か繰返すのは心が迷ふからである。我が心の裏に天の父を認めて自ら神なりとの意識を得ながら猶且

つ天の父を我以外に奉ずるからである。茲が心の二つに分れて迷ひが生ずる點である。天の父を我以外に奉ずるのは猶太宗教の思想であつて、エホバの信念は即ち之である。エホバの神は全然天上に居て人類を支配したものだ。が耶蘇が天の父は一方の足は人間の心に入り、他の片足は天上に跨つて居る。耶蘇が煩悶は此所に存するのである。クリストたる神たる自覺にありながら猶且つ天の父に支配せられた不自由なる究屈なる信念であつた。煩悶に煩悶を重ねた譯である。煩悶を繰返すが中にも彼をして活かしたのは全く彼が自覺に基く復活再來の豫言であつた。若し彼が爲に豫言者の豫言がなかつたとすれば復活再來の信念がなかつたとすれば十字架の場合彼が煩悶は實に悲惨を極むべきものがある。力と頼む天の父は我を棄て、願みない絶

體絶命である然るに獨り我が衷なる神の自覺のみは活潑々地として生きて居るのである之をして覺醒せしめたのが復活再來の豫言であつた

詮ずるに彼は舊約書の豫言を色讀して之を實現せんと試みたものだが之を實現するに當つて衝突は熾然として來つた小なる猶太的信念と大なる宇宙的秘密とが衝突をした耶蘇が煩悶は即ち之であるもし夫れ天の父を破却して偏へに自ら神たるの自覺の上のみ立たしめたならば大自由の境涯に立して煩悶も從つて無くなる可きであるのである假令弟子等は四方に逃げ去つて來らずとも我が事業は痕跡もなく滅裂に歸すと雖も人間としては大失敗でもあらうが天地の上にては大成功である宇宙の上から見れば既に成就されたものであると自覺

の上には聊か動搖を來たすの恐がない我が衷なる神を半分に分裂いて一方を天上に抛つからこそ煩悶が生ずるので宇宙的秘密は横まに衝突を齎すのである然らば則ち宇宙的秘密との衝突を免れんには獨り専ら偏へに自ら神たるの自覺に立つことであるこの自覺を外にしては衝突更に衝突煩悶さらに煩悶である煩悶して煩悶をするのは天上に抛つたる半分の神を追ひ尋ぬるの心である之を追ひ之を尋ねたりとて何の處にも居る可き筈が無い抛つたる半分の神は既に死したのである心の衷に遺れる半分の神のみが生命として生きて居るばかりである活ける半分の神が死せる半分の神を追ひ尋ぬるところに煩悶は横ふるのである耶蘇の大なる欠陥とは即ち是である、斯る欠陥あるが爲に彼は煩悶に煩悶を繰返した譯であるが誤

謬は誤謬として迷妄は迷妄として、兎にも角にも彼は猶太人だ
けに、また猶太的獨特の或者を體得することが出來た、猶太古來
からの永續したる、成長したる、發展したる時代思想を汲んで之
を呑み、以て自ら育ひ、以て自ら悟り、以て自ら實現することが出
來た、取も直さず來るべきメシヤの自覺である、猶太人の耶蘇と
しては其理想を満足に實現したものと云はねばならぬ、小なる
舊約の理想が大なる宇宙的秘密と衝突をしたにも關らず、身を
以て之と闘ひ、死を遂げて悔ひざるの精神に至つては、頗る偉大
なるものがあるのである、

一旦逃去つたる弟子等は、耶蘇の死後、覺えず自ら發心して傳道
に身を捧ぐるに至つた、耶蘇が有したる偉大なるあるものに感
激せられたものである、耶蘇一たび斃れて其面貌が見へなくな

つた、面貌が見へなくなつて反つて其真相が發揮された、弟子等
は其教訓を思ひ、其言行を思ひ、其偉大なる自覺を思ひ、仰慕憧憬
に堪へざるものがある、心機啓徹、忽ち頓悟したのである、十字架
の後、一ヶ月餘にして弟子等は申合せたる如く耶蘇の墓地に集
つた、今昔の感を同じうした譯である、各々志を談じて志の向ふ
ところが同じであつた、精神と覺悟が符節を合したものである、
ペンテコステの祭を機會に、參拜者を要して耶蘇教的傳道を試
みた、耶蘇死して五十日目である、耶蘇教は茲に成立した、ペテロ
なる岩の上に建てられたのである、

第拾壹章 結論(上)

猶太の時代精神に就ては、大略述べた通りであるが、イヌラエル

民族がローマの壓制に逢ふて異邦に漂流すること多年、奴隸の境遇より脱せんとする自由の精神が衝動して、ローマに反抗すると同時に、理想的の社會を建設せんを希求するに至つた、一言にして之を云へば敵愾心は向上して理想的天國の降臨を希求するに至つたもので、宗教的時代精神である、古來幾多の豫言者と哲人とが輩出して、天國の理想を實觀せんがために力を盡くした、イスラエル人は斯る時代精神のために動いて居つた、時代精神はイスラエルの生命であつた、其生命の生命たるものが所謂豫言者である、時代は日月と共に推移して根本精神は愈々發展した、

イスラエル人が其降臨を希求する天國の觀念には、之を齋らすべき理想的人格、即ちメシヤの觀念が相伴ふたものである、天國の降らんとするや、メシヤ先づ現はれて天國を建設すると云ふのである、理想の天國と、之を齋らすべき理想の人格とは影の形に添ふが如きもので、別つ可からざる一體の觀念である、天國降ると云へばメシヤ來ると云ふことになる、メシヤ來ると云へば天國降ると云ふことになる、されば天國を齋らす可き理想の人格は、果して何處より來るであらうか、神なるエホバより來るべきものと信ぜられたものである、神格の人としてエホバの化身と信ぜられたものである、

されば幾多の豫言者は後から後へと起つて、この時代精神を鼓吹するに務めた、或は之を詩に謳ひ、或は之を文に草し、若しくは之を雄辯に揮つて以てイスラエル人を指導したものである、天國の降臨せんがためにはエホバの法律を守り、神の聖旨に従ふ

べしとはアブラハム及びモーゼの遺訓であつた、イスラエル人はこの遺訓を奉ずべきであるが、道心鈍ふしてなかくに神の聖旨に従ふことが出来ない、神罰と災禍とが屢々降つた、茲に於てか幾多の豫言者は前後に起つた、之を戒め、之を勵まし、或は之を鞭つゝの極、逆まに石にて撃たれ、血を流すに至つたものも往々あつた、降る可き天國及び來る可きメシヤの理想については、代々の豫言者によりて種々様々に解釋せられたが、之を一貫したる根柢は勿論あるのである、天國の具象的なること、天國の降るや俄然的なること、メシヤの王的なること、メシヤは審判を行ふこと等は、何つれの豫言者も異口同音であつた、イザヤは最も能く之を説明したる豫言者である、如斯くにして天國の理想は愈々發展した、雲蒸し、風起り、耶蘇基督は出現した、

從來の豫言者は何つれも皆降る可き天國に就て行動したものである、バプテズマのヨハ子の如きは天國は近きにありと叫んだ、耶蘇に至つては天國を齎すべきメシヤ、即ちクリストは己れ自身であるとの宣言をした、時代精神の理想たるメシヤの自覺を以て現はれた譯である、かくて彼は天國はこゝに見よ、かしこに見よと云ふべきものに非ず、天國は汝等の心にありと心靈の覺醒を促したが、一方には又天國が具象的にして而も忽然として降る可きことを宣へ傳へた、この具象的忽然的の天國こそは、彼がメシヤの自覺に伴ふ可き天國に對する必然の觀念である、ヨハ子が天國も具象的と、抽象的と混同されたる天國であつたが、耶蘇が天國も亦人の心を指すと同時に、具象的の天國である、蓋し人々が悔改めて心を正しふすると共に、天國が降ると云ふ